『人文学報』第113号（2019年４月）
（京都大学人文科学研究所）

京都・染織祭の創設と展開

―― 昭和恐慌・大衆消費社会・産業観光振興の交点 ――

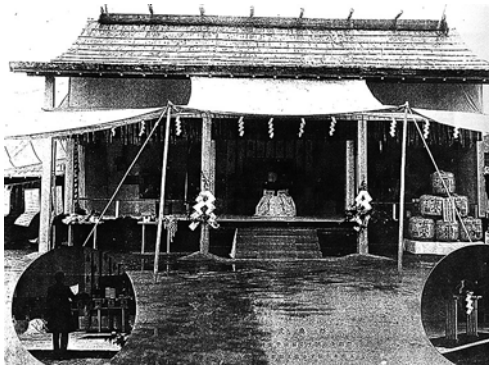
北　野　裕　子*

はじめに
第１章　創設への道程　―― 発端・中核・構想
　１　祭りの発端
　　―― 京都染呉服商（問屋）の発案と日本染織物見本市協会
　２　具体化する祭り　―― 染織講社の設立・呉服祭から染織祭へ
　３　大衆祭の構想　―― 時代祭への対抗・大衆の時代
第２章　染織祭の背景　―― 京都染織業界と京都市，それぞれの思惑
　１　京都染織業界の動向　―― 大衆品と高級品の景況差
　２　室町問屋業界内部の問題　―― 丹後縮緬（ちりめん）をめぐる軋轢
　３　京都市の思惑　―― 財政事情・大礼博覧会の開催・観光課の設置
第３章　染織祭の展開　―― 第１回・第３回染織祭と女性時代風俗行列
　１　第１回染織祭　―― 大京都市誕生祝賀会に準じた行列
　２　第３回染織祭　―― 女性時代風俗行列の完成
　３　四大祭の一つに
　　―― 染織講社の財政・京都市の補助金・祭りの広がり
第４章　染織祭の変質　―― 戦時期・戦後復興期の活動
　１　日中戦争下の活動　―― 各種展覧会への要請
　２　太平洋戦争下の活動
　　―― 苦悩する祭典（祭祀）の継続と衣装の保管
　３　戦後復興期の活動　―― 時代祭への要請・染織講社の解散
おわりに

* きたの　ゆうこ　龍谷大学経済学部

は　じ　め　に

染織祭は昭和6年（1931），昭和恐慌期に京都染呉服商（問屋）が発起，京都染織業界を中心に京都府・市・商工会議所等に広げた「染織講社」を組織し，20年余，春の京都で挙行された祭りである。主に祭祀と女性時代風俗行列から成り（写真1・2），前者は岡崎公園グランドに仮設した社殿で染織祖神を祀り，後者は8時代構成（上古～江戸）で143人分の衣装を制作，京都花街の芸妓が着装して市中を練り歩いた。男性装束のみの時代祭と対比され，祇園祭にも匹敵する観客数に染織業界のみならず，多くの業界が便乗し，当時「京都四大祭の一つ」と謳われた。京都の高度な学識や技術を駆使した風俗行列は，その豪華さゆえ，日中戦争が始まると自粛され，昭和8～12年の5年間で終わった。しかし，祭祀はその後も継続し，戦後復興期には再び時代祭に協力する形で風俗行列が登場した。なお，本文末に〈付表1　染織祭年表〉を入れたので，適宜，参照願いたい。



山本花魁『染織祭グラフ』山本印刷工業　1931年
写真1　祭祀風景（仮設社殿）（昭和6年）

（公社）京都染織文化協会所蔵・提供
写真2　時代風俗行列風景（昭和8年）

このように，激動の時代を駆けた染織祭は短命に終わり，その後，京都の歴史に記されず，市民からも忘れられた。しかし，主体となった染織講社の解散（昭和26年）後，一度だけ，染織祭で制作された衣装の行列，「染織まつり」が昭和59年（1984）に開催されている。宮崎友禅斎生誕330年記念奉賛会が事業を統括，京都府・市・商工会議所，京都新聞社等が共催し，その記録として切畑健編『写真でみる日本の女性風俗史』[1] を出版している。同書は衣装の写真と解説が中心で，染織祭の開催は「昭和6・7・8年の3年だけ」[2] とあり，本格的な歴史調査がなかったことがわかる。また，平成27年（2015），神戸ファッション美術館が染織祭衣装の展覧会を開催し，その図録『日本衣装絵巻 —— 卑弥呼から篤姫の時代まで』[3] でも衣装と染織技法の解説に重点が置かれている。

一方，「祭り」に着目し，都市民俗学の視点から阿南透「昭和初期の『新しい祭り』—— 京

阪神の事例から」[4] が昭和初期に大阪市・京都市・神戸市で開催された「新しい祭り」の一つとして染織祭を論じている。大正末から昭和初期に周辺地域を合併した三つの市が行政主導で祭りを開催したと指摘する。三つの祭りには各都市に縁のある時代風俗行列があり，同じ人物が監修という共通点はあるが，果たして，染織祭は「京都市の主導」と言えるのだろうか。

このように服飾・染織史や民俗学からの研究はあるものの，歴史学からのアプローチはなく，拙稿「忘れられた祭　京都染織祭」[5] で，戦前の時代祭・葵祭には女人列がなかったが，染織祭の行列は女性や大衆が主役であり，昭和初期という時代状況を反映していたことを指摘した。ただ，先行研究と同様，『京都日出新聞』の記述が多い創設期のみで，昭和恐慌下に創設した理由も，祭りの全容も解明できていない。

そこで，筆者は平成 21 年（2009），衣装を保管する社団法人京都染織文化協会（「協会」と略す）を直接訪ねた。後日，担当者と，当時，京都産業会館 5 階にあった倉庫に入り，祭りの主体とされる染織講社の関係文書 55 点を見つけた。今回，本文末に〈付表 2　染織講社関係文書リスト〉を掲載した。戦時期の文書が多く，戦後復興期の文書もある。平成 23 年，協会が公益社団法人となり，筆者も協力し，染織祭に関する展示・講演・広報活動を続け，先の文書に加え，これまでに映像や市民の撮影写真等の提供も受けている。本稿では従来の新聞記事に，染織講社関係文書や協会所蔵資料，京都市の史料等を加えて論じる。

さて，本稿の目的は，① 染織祭の創設理由の解明，② 染織祭の全容の解明にある。染織祭の創設は，日本経済史においては昭和 4 年（1929）の世界大恐慌の発生を受け，日本へも恐慌が波及し，経済が最も悪化したとされる昭和 6 年であった。この昭和恐慌と呼ばれる時期に多額の費用と人力が必要な祭りをなぜ創設したのか，いや，なぜ創設できたのか。ただ，当該期は経済不況が叫ばれる一方で，大衆消費社会の萌芽がみられたことも近年明らかになってきている[6]。都市部の新中間層から大衆へ消費社会が広がるのはいつからなのだろうか。この恐慌と大衆消費という両者の関係を染織祭の創設を通して考える。そのために，祭りを創設した京都染織業界，その中核となった京都染呉服商（問屋）の実態を分析し，さらに祭りを支援した京都市の動向を解明していく。

その上で創設した祭りの実態を紹介し，従来全く研究がなかった戦時期，戦後復興期の展開を可能な限り加え，曲がり形にも全容の解明を試み，染織祭の意義を論じたい。なお，今回は「染織講社」が主体となった昭和 6～26 年の「染織祭」を対象とする。また，戦前は「衣裳」が一般的だが，本来「裳」は下半身に着けるヒダのある巻物のため，本稿では史料中を除き，戦後，広く使われる「衣装」を使用したことをお断りしておく。

第１章　創設への道程　―― 発端・中核・構想

1　祭りの発端　―― 京都染呉服商（問屋）の発案と日本染織物見本市協会

不思議なことに，染織祭創設の発端や理由について主体となった染織講社が明確に述べた史料はほとんどない。なぜ，染織祭を創設したのか，その理由については第２章で詳細に検討していくが，ここでは協会が保管する発端に関する唯一の史料を提示する。ただ，この史料は，創設から 15 年以上を経た昭和 22 年以降の文書中に所在する。

【史料 1】　昭和五年秋，時ノ京都府佐上信一，京都市長土岐嘉平，京都商工会議所会頭大澤德太郎，京都染織〔ママ〕見本市協会理事長竹上藤次郎〔ママ〕五氏ト府，市，商工課長，会議所事業課長，見本市協会幹部間ニ於テ府民ニ最モ関係深キ染織祖神ニ感謝ノ意ヲ捧グベキ祭祀ヲ行フコト提唱（略）[7]

昭和５年（1930）秋，府，市，商工課長，会議所事業課長，見本市協会幹部の間で府民に最も関係が深い染織祖神に感謝し，祭祀が提唱されたのが発端だったという。なぜ，この時期に染織祖神に感謝する祭祀の創設が必要だったのか。確かに西陣ではやすらひ祭を今宮神社で挙行していたが，染呉服商単独や京都染織業界全体での祭りはなかった。

実は，この史料より，早い時期の発起を指摘しているのが，以下の史料である。

【史料 2】　染織祭の計画は昨秋日本染織物見本市協会理事者間に於て協議され，これより先，八月末，丹後縮緬宣伝大会当時，津原組合長及丹城（安藤商店）桑原（吉田忠）矢守（丸紅）山川（市田）各支配人等と都下新聞経済記者団との懇談会の席上，染織京都の発展策として話題に上ったのが濫觴であらう。（略）[8]

これは，第１回染織祭の開催直後に刊行された『染織祭グラフ』の記述で，昭和５年８月末に開催された丹後縮緬宣伝大会の時に，丹後縮緬同業組合長津原武と丹城（安藤商店）桑原（吉田忠商店）矢守（丸紅京都店）山川（市田商店）の各支配人等と在京の新聞経済記者団との懇談会の時，染織京都の発展策として話題に上ったのが発端だったという。

当時，西陣織物や染呉服の問屋は市内に 300 軒以上あったが，市田・吉田忠・安藤・丸紅は「四大商店」と呼ばれ，京都織物市場の中心を担っていた[9]。史料１・２を合わせると，この４社が８月末に発案し，秋になって，府・市・会議所・見本市協会へ広げ，染織祖神に感謝する祭祀をという流れになる。ただ，史料１・２からは創設に関するこれ以上の情報はない。

やがて，年が明けた昭和６年１月から新聞報道が始まる。最初に登場するのが，以下の記事で，この前日（18 日），見本市協会役員と府・市・会議所が協議した。

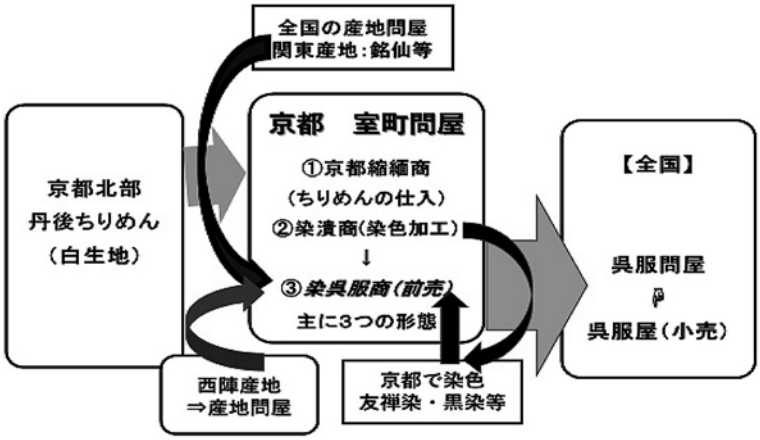
【史料 3】　桜咲く陽春四月　華々しい呉服祭

染織の都 ―― 京都市は全国的にも世界的にも染織の都として名に恥じない生産と販売施設をもち，地方筋の入洛は四季を通じて夥しい（略）府，市，会議所当局では夙に当業者

を鞭撻指導して日本染織〔ママ〕見本市，京染，丹後縮緬宣伝大会，西陣織物宣伝大会，その他桐生，八王子等関東織物の宣伝大会等継続的に催し，地方客の吸引につとめてゐる。而してこの盛んなる染織の都，春秋二季呉服祭を挙行することが必要であるとの世論が昨秋あたりから広く行はれ，府では織物関係の祭神を物色するなど，この計画は俄然具体化して来たが見本市協会では陽春四月染織見本市の開催と同時に華々しく呉服祭を行ふことになり(略)[10]

この頃，染織の都と謳われた京都市は，西陣織物や京染（注10を参照）の一大産地で，仕入れに来る地方業者が四季を通じて多かった。府・市・会議所の指導のもと，日本染織物見本市，京染宣伝大会，丹後縮緬宣伝大会，西陣織物宣伝大会の他に桐生・八王子等関東織物の宣伝大会等が継続的に開催され，地方の呉服問屋や小売店を集めた。そんな状況の中，昨秋から呉服祭の挙行が必要という世論が形成され，日本染織物見本市協会が開催する4月の見本市と同時に「呉服祭」を行うことになったという。

ところで，この「日本染織物見本市協会」とは，どのような組織だったのか。その前身は大正14年（1926）創立の「京都染織物見本市協会」（昭和5年に日本染織物見本市協会と改称）で，事務所を京都商工会議所内に置き，「染織ノ見本ヲ陳列シ全国有力ナル染織物販売業者ヲ招待シテ売買ヲ行ヒ商取引ノ改善ヲ図ル」[11] ことを目的とした。図1のように，京都の染呉服商から仕入れていた地方の呉服問屋や呉服店（小売店）が，直接，会場で流行の商品見本を見て，予約注文してもらうことで製造の無駄をなくし，製造・流通の両面から商品の価格低下を図ろうとした。明治期の博覧会や品評会のように商品を一堂に展示して順位を競わせることよりも，見本市では販売に重点が置かれた。



注）森口繁治編『京都商工要覧』京都商工会議所1938年の「京染呉服」392～426頁，拙稿「昭和初期の京都染織業界」2017年の図2（107頁）を参考に筆者が作成。

図1　呉服の生産流通構造

見本市の創設時，京都市長安田耕之助は「京都染織物見本市開催に就て」のなかで，京都の産業的生命は西陣織物と京染で保持されているに違いなく，岡崎の勧業館で開催される見本市を「将来独逸のライプチツヒに於けるメツセの如くあらしめたく切望して止まない」[12] と述べ，世界的な見本市にしたいと業者を鞭撻指導していた。

さて，第 1 回見本市（大正 15 年開催）は，「西陣織物部（21）・染呉服部（39）・洋反物部（10）・木綿部（12）・関東織物部（8）・半衿部（8）・肩掛首巻部（9）」【（　）は店数】[13] で構成され，京都で生産される西陣織物・染呉服を中心に半衿・肩掛首巻，関東織物・木綿のほか，まだこの段階では少ないが，昭和になって普及する洋服の生地も出店している。それまで，分野ごとにバラバラであった京都染織業界が，一つのイベントを同一会場で行うことは画期的なことであった。

この見本市協会の中核を担ったのが，冒頭の安藤・吉田忠・丸紅・市田の四大商店を筆頭とする染呉服商たちであった。彼らの多くが，京都市の中心を南北に走る室町通周辺に店舗を構えたため，通称で「室町問屋」と呼ばれた。室町問屋は図 1 のように販売と製造の両方に関わり，当時，① 京都北部の丹後から京染呉服の生地になる縮緬（白生地）を仕入れる京都縮緬商（問屋），② 京都縮緬商から生地を仕入れて京染を施す染潰商（染色加工），③ 完成品を仕入れて全国へ販売する染呉服商（さらに流通を前に進めるため「前売問屋」とも呼ばれる）のおよそ三つの形態があった。四大商店は③にあたり，室町問屋の中でも最も規模が大きく，室町ルートで生産・流通する京染呉服の他，西陣織物や関東織物など全国の産地問屋からも仕入れ，全国の呉服問屋へ販売する，まさに呉服の総合商社だった。明治期の室町問屋は大半が専門問屋だったが，四大商店のような呉服の総合商社が誕生してくるのは第一次世界大戦以降のことだった[14]。

2　具体化する祭り　―― 染織講社の設立・呉服祭から染織祭へ

昭和 6 年（1931）1 月 18 日，日本染織物見本市協会と府・市・会議所で「呉服祭」の開催が決定し，1 月 21 日には第 1 回協議会が開かれた。

【史料 4】　染織都市たる京都にふさはしい呉服祭執行計画はさきに報道した如く京都染織業者を網羅する見本市協会が主唱者となり，これが実現を具体化すべく廿一日午前十時から京都ホテルにおいて第一回協議会を開催，府から保安課長，森商工課長，市から天矢観光課長，鈴木勧業課長，会議所から平田理事，武内事業課長，染織見本市から竹上理事長他役員等出席の上，呉服祭につき具体的協議をなした（略）。実行方法としては前記の如く府，市，会議所当局が之を主催し，染織関係各組合並に有力実業家を網羅してこれが後援に当り，祭典は京都神職会にこれを委ねることとなつた（略）[15]

呉服祭は見本市協会が主唱者となり，実現に向けて府・市の役人と会議所の役員らで具体化し

ていく。ここでは，① 市から観光課長と勧業課長が参加している点，② 府・市・会議所が主催，業界が後援するという点，③ 祭典は京都神職会が担当するという点について注意したい。とくに②の主催と後援の関係は以下のように変わっていく。

1月末には染織業者を中心に講社を組織して「時代祭，祇園祭に準じて京都の三大祭」[16] という意気込みで，2月16日に発起人会を開催し，染織講社が主体となること[17]が決まってゆく。その「規約」には，第6条で「社員」を【第一部】染織業者の団体，【第二部】染織と関係ある団体，【第三部】特に本講社の事業を翼賛する者及びその団体とし，また，第8条で「役員」には会長・副会長・評議員・理事を置くとある[18]。

社員は，第1回染織祭の参加団体から推測すると，日本染織物見本市協会と西陣織物商組合・京都半襟商組合・京都刺繍同業組合・京都染物同業組合・西陣織物同業組合・京都縮緬商組合・京都浜縮緬商組合・京都生絹同盟会・丹後縮緬同業組合・京都染呉服商組合・関東織物商組合（盛奨会）・京染呉服悉皆同業組合・京都木綿商組合の業界13組合，さらに京都小売商連盟が加っている。これらの京都の団体以外に，のちに蚕糸商同業組合・洋反物商組合・福井織物同業組合・秩父織物同業組合など他府県からも参加している[19]。

また，役員には，名誉会長に府知事，会長に市長，副会長に会議所会頭，評議員（51名）は組合長・百貨店社長・室町問屋社長等，見本市協会理事長を筆頭に常任理事（24名）は各団体の副組合長・神職等，理事（12名）は室町大手前売問屋の支店長・支配人等，幹事（4名）は府・市から2名ずつが就任している[20]。

主唱した業界団体の上に行政が座わり，いわば「公民合同」[21] の組織といえるが，講社内の人員数をはじめ，後述する金銭面や活動面では，圧倒的に業界が負担している。業界の発起，それに賛同した行政という形で祭りの創設が進行し，組織上も，【史料4】のいう府・市・会議所が主催，業界が後援ではない。ゆえに，先行研究（注4の阿南）が指摘する行政主導の祭りとは言えないだろう。

ところで，当初，「呉服祭」と命名したが，以下の理由から「染織祭」へと変更される。

【史料5】 呉服祭をあらためて「染織祭」とすること

> 呉服なる言葉は平易ではあるが呉なる文字はもともと支那を意味するものであるから我国固有の神式を発揮する上に考慮しなければならないといふので種々討論の末結局，呉服祭の言葉を改め「染織祭」とすることに決定をみた。（略）本事業を遂行する主体として設けられる染織講社はその本部を平安神宮内に置くことゝし目下同神宮と交渉中（略）[22]

呉服という言葉は支那（中国）の呉を意味するので，日本固有の神式を発揮するために，討論の末，「染織祭」に決定し，染織講社の本部を平安神宮に置くことになったという。

そして，祭神については，当初，府社会課が調査し，太秦大酒神社の呉織神・漢織神，西陣織姫神社の栲幡千々姫命，蚕の社の木花開耶姫命を祭神とし，平安神宮に降神合祭する案が出

たが，祭りの名称と同様に「往昔から染織を掌られた日本固有の神々方が沢山あるからこれを祭り支那から渡来した神様は別にお扱ひするのが至当である」[23] という意見が神職界から出て，京都神職会に一任することになった。

それを受け，京都神職会は，様々な史料をもとに染織に関わる神々から，天棚機姫神・天羽槌雄神・天日鷲神・長白羽神・津咋見神・保食神・栲幡千々姫命・呉織女・漢織女を選定した[24]。なお，呉織女・漢織女についても，呉服祭の名称と同様に渡来してきたことから異議を述べる者もいた[25]。

3　大衆祭の構想　―― 時代祭への対抗・大衆の時代

染織祭の形を議論するなかで，「『大衆祭』新設は今年は駄目　調査と研究を要し間に合わぬ」という見出しで「時代祭に対抗する意味の『大衆祭』の新設，つまり時代祭の要素となってゐる当時の支配階級の風俗に対照せしむるため当時の平民の風俗を表象するといふ企ては関係者の大賛成を得た」[26] という記事が見える。時代祭の支配階級の風俗に対抗して，平民風俗を表象した「大衆祭」を新設するという構想だったが，相当の調査研究が必要で，4 月の第 1 回染織祭まで時間がなく，明年以降に持ち越されることになった。

確かに高位な人々の服装は多くの史料が残り，探ることができるが，平民の服装は記録が少ない。当該期は，大正時代の第一次世界大戦（大正 3～8 年・1914～1919）の好景気を受けて，多くの女学校が創設されるなかで，日本服飾史が講義内容として確立していく揺籃期で，今日のように身分の高い人々から庶民に至るまで豊富な内容を明らかにできる段階になかった。この点については，第 3 章 2 で詳述する。

さて，この大衆祭の構想については，当初から市民の関心が高く，そのため，第 1 回染織祭が開催される当日の『京都日出新聞』に，以下のような意見が掲載された。

【史料 6】　社説　染織祭を讃ふ

> 世に所謂お祭り騒ぎなる語があって騒ぐためにお祭をやつてゐるような実例を吾人は度々見せられてゐる，染織祭は京都独得のものであり，本年を最初に今後年と共に盛大に趣かしめ尠くも日本の名祭として全国的のものたらしめねばならぬ。（略）
>
> 最初染織祭の計画発表されるや各方面から祭を賑やかすための催物の一つとして「大衆行列」の企てを願つた，これは現在京都の名物となつてゐる時代祭，即ち平安朝時代に於ける支配階級の服装行列に対し当時の被支配階級たる所謂町人百姓の風俗を見せ染織祭を一層印象づけようとするもので適切な目論見であつたがその服装を調査し整へることが容易でないため遺憾ながら明年の本祭まで延期することになつた，染織祭の附物として此の大衆行列が実現する時，一層華かさを増すであらう（略）[27]

社説では，まず，染織祭は単なるお祭り騒ぎではなく，京都独得のもので，これから日本の名

祭として全国的なものにしていこうと呼びかけ，祭りを賑わせるための「大衆行列」を切望する。時代祭の支配階級の服装行列に対し，被支配階級の町人や百姓の風俗を見せ，染織祭を印象づけるようとしたが，調査や調製が容易でないため，次年度まで延期することとなった。この延期について先行研究（注１の切畑）では「昭和恐慌」としているが，管見の限り，経済不況という理由は見られない。

それにしてもなぜ，「大衆祭」という構想が登場したのか。時代祭と染織祭の対比で祭りの特徴を鮮明にしようとした点が大きい。ただ，時代祭には男性支配階級が身につける織物を生産してきた西陣が関わってきた一方で，染色技法の最高峰とされる友禅染は江戸時代 17 世紀末頃から富裕な町人女性の小袖（近代以降は「きもの」）で発達したものの，男性や武家・公家の小袖には描かれず，時代祭の表舞台には登場できなかったことがあるのではないか。今日でも「織物は染物よりも上」という意識が京都染織業界にあるという[28]。

しかし，第一次世界大戦後に成長する大衆は第２章で詳述するように，それまで富裕な人々しか身につけることができなかった京染呉服を求めるようになっていく。まさに，この大衆のニーズを読んで商売をしたのが室町の染呉服商（前売問屋）であり，そんな大衆の時代を表現しようとしたのが「大衆祭」だったのではないか。

第２章　染織祭の背景　―― 京都染織業界と京都市，それぞれの思惑

このように昭和５年（1930）の８月，丹後縮緬同業組合と室町四大商店が発案，その後，秋には日本染織物見本市協会から京都府・京都市・商工会議所が賛同，昭和６年の年頭から祭りの創設が本格化し，主体となる染織講社の設立や染織祭という名称の決定，大衆祭の構想など，祭りの実施に向けて具体化していった。

ところで，この染織祭の発端から構想にかけての昭和５年から６年という時期は，一般に昭和４年 10 月に発生した世界大恐慌の影響が日本に及んだ「昭和恐慌」と呼ばれる時期だった。このような経済状況が悪化した時期になぜ，染織祭の創設をしたのか，いや，できたのか，本章では祭りに関わった業界や行政の事情を探っていく。

1　京都染織業界の動向　―― 大衆品と高級品の景況差

祭りが発案され，賛同者が広がり始めた昭和５年秋，京都染織業界の景況はどのようなものだったのか。以下の【史料 7】は同年 10 月発行の『京都府市会議所連合調査報告書』から，冒頭の「重要商品概説」の一部を抜粋したものである。この需要商品とは西陣織物・関東織物・京染呉服・刺繍及び半衿服飾品・陶磁器・銅器・漆器・扇子である。

【史料７①】　重要商品（十月）概説

（略）日本銀行の利下，興業銀行の会社救済，単名手形引受等政府は従来の峻厳なる緊縮一点張の態度を稍改めたので年末財界恐慌に対する息詰るやうな不安の気分が幾分緩和されたかの感を生じた。（略）

但し京都重要商品中西陣織物の如きは徒らに警戒の厳重に失し折角到来の乗ずべき好機を逸し，其他陶，銅，漆，扇は何れも何等関知せざるものの如く依然静閑を極めて越月した。

唯最も活況を呈したのは関東織物で，其の品払底の御蔭を蒙ったのは独り染呉服類のみであつた。（略）[29]

昭和５年１月，世界大恐慌のなかで，緊縮財政を唱える民政党の浜口雄幸内閣のもとで金解禁が実施された。しかし，政府が緊縮一点張りから少し政策を変更したことで，当初の財界恐慌に対する息詰まるような不安も，秋には緩和されてきたらしい。ただし，京都の重要商品のなかで，西陣織物は徒らに警戒が厳重で，折角到来した好機を逃しているという。そして，最も活況だったのは関東織物で，染呉服類は関東織物が売れ切った恩恵を受けていた。では，ここにいう折角到来した好機とは，いったい，どのようなものだったのか。

【史料７②】　爰に注目すべきは大衆が絹物に対する需要心理の動きである。今季絹物の売行旺盛は勿論大衆向値頃に価格の低落してゐた為めであつて之を以て大衆の生活全般が向上したと観る事は軽率であらうが，人情として一旦絹物を着た者が再度木綿物に戻ることは頗る困難であるから絹物の相場が激騰せざる限り今後と雖も大衆は絹物に対する購買心を捨てない事が想像出来るから引続き大衆向を基調としたる絹織物の値頃品を製織し又は販売することは当業者として当然執るべき方針であらう。

其他の重要商品と雖も徒らに高級品たるの空名をのみ誇とせずして現代大衆の生活の実際に即した物品を創造し而かも値頃に之を提供することが軈て自己〔ママ〕の業を隆盛に導く所以であることと知るべきであらう。（略）[30]

今季は大衆向けの値ごろに価格が低下した絹物の売れ行きが旺盛で，この状況をもって大衆の生活が向上したと観るのは軽率だが，一旦，絹物を着た者が再び木綿物に戻ることは困難で，今後とも大衆需要が予想され，大衆向に絹織物の値頃品を製織・販売することが執るべき方針だという。

ところで，なぜ高価だった絹物が大衆向け値頃になったのだろうか。最も好調とされた関東織物では，当時，「銘仙」という織物が斬新なデザインと価格の安さで，若い女性を中心にオシャレ着として人気を博していた。銘仙の原糸は生糸ではなく，繭から生糸を作る際，機械化が進行するなかで機械にかからない大きさや形の繭など，屑繭と呼ばれた繭を化学処理して作るいわばリサイクルの絹糸である紡績絹糸を使用した。その上，第一次世界大戦中に，それま

でドイツからの輸入に頼ってきた化学染料の国産化が進み，化学染料の価格も低下し，さらに，力織機も導入され，原料糸・製織・染色とすべての工程での価格低下が進んだ織物だった[31]。従来，染呉服を中心に販売した四大商店も，この時期には銘仙を関東産地から仕入れ，大量に販売した。

その一方，暗に「徒らに高級品たる空名をのみ誇とせず」と，西陣織物をはじめ，陶磁器・銅器・漆器・扇子の工芸品を批判し，大衆に向けた製品を提供していくよう促している。西陣織物については，昭和４年末，京都府・市・会議所をはじめ，京都大学教授本庄栄治郎らを交え，「西陣織物振興会」を発足させ，その救済策を模索していた[32]。後述（第３章３）するように，『京都市議会会議録』にも，西陣の窮状が訴えられている。

ところで，この「大衆」とはどのような人たちなのだろうか。染織祭の開催が決まり，染織講社を組織した昭和６年２月の『大阪朝日新聞』に以下のような記事がみえる。

【史料８】　猫も杓子もお蚕ぐるみ　生糸安が齎した絹織物全盛時代

現に尾州方面における農村の娘さんや紡績女工さんの如きは従来常着として木綿縞や絣，よいところで紡琉絣を着ていたものが世間に不景気風の吹き荒むにつれて銘仙を着るようになり昨今では木綿縞，絣を着ているものは珍らしいという変り様である，これは一つに銘仙類が三四円で手に入るようになつたからであつて，この事実は独り尾州地方のみでなく全国の都鄙共通の現象らしく，絹布機業家は一度び絹物がかやうに全国都鄙の素人筋に行き渡つたからには本年もまた昨年同様に銘仙を中心として縮緬や平絹（染生地）の需要が活発であらうと先行きを楽しみ早や取らぬ狸の皮算用をして懐ろの温り加減を夢みてゐるとか[33]

尾州（愛知県西部）方面の娘や紡績女工は従来，常着として木綿縞や絣を着ていたが，世間の不景気風が吹き荒れると銘仙を着るようになり，今では木綿縞や絣が珍しくなっている。この現象は銘仙類が３，４円で手に入るようになったからだという。安価になってきたことが需要創出の一因で，この現象は尾州だけでなく，全国の都会でも田舎でも共通の現象らしく，絹布の機業家は一旦，全国へ行き渡ったからには，本年も昨年同様，銘仙を中心に，銘仙よりも格が高い京染呉服の生地になる縮緬や平絹の需要が活発だろうと，大衆の志向が上昇していくことを予想する。ここにいう「大衆」とは，都市部の新中間層だけでなく，全国の農村の娘や紡績女工までを含む人々を想定している。

この予想は的中したようで，それから２か月後，第１回染織祭当日の新聞には「京都における織物取扱高実に五億円，そのうち三億円は京染呉服によって占められる盛況」[34]という記事が掲載され，実に京都織物取扱高の６割を京染呉服が占めたという。大衆向けオシャレ着・銘仙に比べ，京都で友禅染・模様染・黒紋付染等を施す京染呉服は，振袖や訪問着，喪服や留袖などフォーマルに着用する高級着物が多い。しかし，銘仙に加え，さらにステージが上がった

京染呉服を販売していた染呉服商は絶好調だった。

2　室町問屋内部の問題　―― 丹後縮緬（ちりめん）をめぐる軋轢

それにしても，銘仙はもともと安価な絹織物だったが，なぜ，京染呉服の需要が高まったのだろうか。その一因として，京染呉服の生地になる縮緬の価格が低下したことがある。染織祭が発起された昭和5年（1930）秋，縮緬の販売見通しを四大商店の一つ，丸紅京都支店長・矢守治太郎は，次のように述べる。

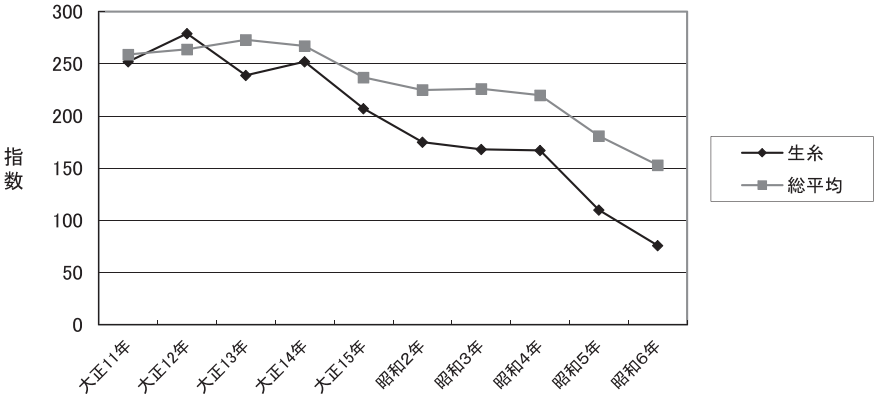
【史料9】　生活向上に拠る高級品への憧れは人世の通有性あるが故に，仮令政府の緊縮，節約の声如何に大なりとも，養蚕地或は特種〔ママ〕の事情に由る農村地方を除く都会地に於ては寧ろ本年の如き前年より三四割方の安値は却て絹布に対する需要を喚起せしめるであろう。（略）

元来縮緬と言へば即ち織物界中の最高級品贅沢品視されてあつたが本年に於ては，十円を以て相当品を容易に求め得ると云ふ画期的安値を見せた事に於いて大衆年来の憧れを満足せしめ為めに相当の需要を呼ぶものと思惟さるゝ。（略）不景気とは云へ丹後縮緬の将来は前途に洋々たる観を持つものと考へる。（略）[35]

政府が緊縮策を訴えても，人には生活向上による高級品への憧れがあり，養蚕地や特殊な事情がある農村を除けば，前年より3～4割の安値のため，絹布に対する需要が喚起されること，とくに縮緬は最高級品で大衆の長年憧れで，相当の需要を呼ぶものとして，不景気とはいえ，丹後縮緬の将来は前途洋々だという。矢守の読みは先の【史料8】と同様，大衆の需要を予想している。

では，なぜ縮緬が「画期的安値」になったのだろうか。主因としては，原料となる生糸の価格が，第一次世界大戦の好景気だった大正13年（1924）に比べると昭和5年（1930）には約4分の1に低下していたことがある（図2）。低下の理由は，①大戦景気を受けて多くの農家が繭を副業として生産し，植民地でも生産されたこと，②アメリカへの輸出が中心だった日本の生糸は化学繊維の発明や世界大恐慌で売れ行きが低下したこと等で，開国以後，輸出市場に回っていた生糸がだぶついて，昭和初期には価格が下がり，やっと国内の着物へ向けて活用されるようになった[36]。その安価になった生糸を使い，さらに産地では手織りから力織機化が進行したことも価格低下を相乗した[37]。

ところで，縮緬は昭和初期には約7割を京都府北部の丹後地域で生産しており，当地で生産される縮緬は「丹後縮緬」と呼ばれ，丹後の動向が業界を左右した。実は大正後半から昭和初期には盛況にみえた室町問屋内部に丹後縮緬の生産・流通を巡って亀裂が生じていた。なお，丹後縮緬の歴史については，拙著『生き続ける300年の織りモノづくり』[38]で詳述しており，以下，同書をもとに記述する。その前に縮緬の製造工程を簡単に示す。



（出所）日本銀行統計局編『卸売物価指数（明治 20 年～昭和 37 年）』（1964 年）から，生糸と総平均卸売物価指数を抽出して作成した。
明治 33 年 10 月＝100 とした指数

図 2　生糸と総平均卸売物価指数の推移

緯糸を強撚　→　製織　→　精練　→仕上加工　→　出荷
京都→丹後（国練）

縮緬の特徴である表面のシボ（凹凸）は，緯糸を強く撚ることでできるが，織り上げた後で精練という生糸の外側についたセリシン等を落とす工程を施さなければ，柔らかなシボは生まれない。この縮緬織の技術が丹後へ導入されたのは江戸時代の享保年間，1720 年頃と伝えられるが，精練の工程は，明治以降は室町問屋の「京都縮緬商」が仕入れてから，京都でするようになっていた。現在でも丹後から出荷される縮緬は大半が白生地のままで，染色をしないと着物にならない素材生地だが，明治以降は京都問屋の傘下で，ただ賃織するにすぎない状況であった。この精練を丹後へ戻し，白生地として丹後から出荷することが近代丹後縮緬業の悲願で，丹後国で精練するので「国練」と呼ばれ，それを成就すべく大正 10 年（1921）に創設されたのが，丹後縮緬同業組合（現丹後織物工業組合）だった。

昭和 3 年（1928）9 月に丹後の 5 か所に精練工場を新設し，国練を実施する際，組合幹部は上京して京都縮緬商組合の幹部と会見し，理解を得ようとしたが，津原組合長は「図らすも其不満を估ひたるもゝ如く，（略）丹後側に対して，頗る峻烈な決議があった様に伝えられて居る，（略）これは全く意思の〔ママ〕疏通に欠くる処かあり事に行違かあつた為てはあろうふか」[39] と従来の取引を変更することで難しい関係になっていたことを述べている。

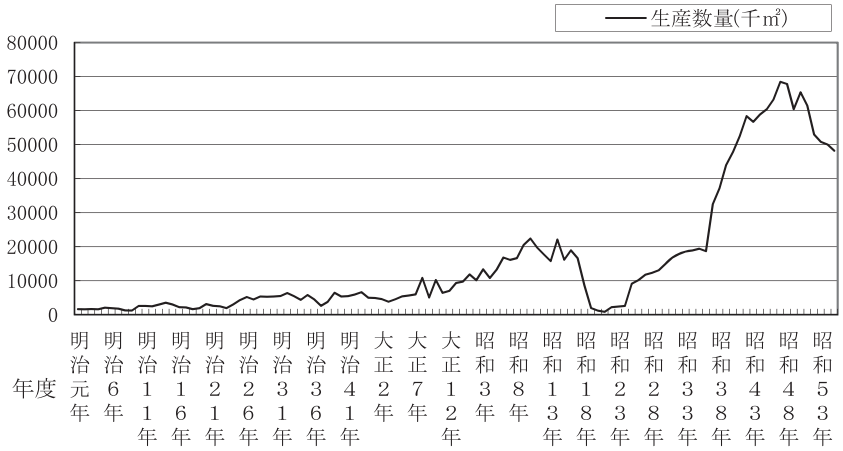
しかし，その一方で，津原は，京都染呉服商の中枢，「丸紅，市田，吉田忠，安藤の四大商店は，当組合の計画に対して同情的援助の立場から，丹後優良縮緬国練普及宣伝大会を発起せられ，近く全国の呉服商人四千余名を京都に招き，国練り検査品の縮緬を紹介して下さる事と

なった，而かも四大商店の御好意は之に止まらす，種々当組合と京都縮緬商組合との間に居中し，意思疏〔ママ〕通に御尽力下さりつゝある」[40] とも述べており，四大商店が国練品の販売支援と共に，丹後と京都縮緬商組合の関係の修復に努めていたことがわかる。

実は四大商店も自ら，大衆向けに百貨店へ大量に縮緬を卸し始めていた。その大衆消費を象徴したのが，世界大恐慌発生の約３ケ月前に大阪梅田で開店した阪急百貨店（昭和４年６月創業）で，呉服店から成長した従来の百貨店に対し，大衆を顧客とする電鉄系のターミナルデパートが誕生した。「どこよりも良い品をどこよりも安く」を掲げた阪急は恐慌下でも順調に販売を伸ばし，昭和６年には早くも売場を増床した。創業時には銘仙以上の呉服は贅沢品のため置かないとしていたが，新たな売場には丸紅からすべて仕入れた白生地の縮緬が大きく店頭を占めた。国練検査の実施で丹後から反物として縮緬が出荷できるようになり，大衆はとりあえず，安価になった縮緬の反物を購入し，お金ができたら染屋に依頼するという２段階で着物を入手する形態が登場した[41]。

このように，昭和初期に呉服市場では，丹後産地での国練実施により，丸紅のような大手前売問屋から，大衆向け百貨店という新たな流通ルートが登場し，第１章１で見た見本市と共に流通改革が進んだ。大衆の経済力向上と商品の価格低下が符合したことで消費が拡大してゆく。図３は丹後織物の生産量の推移で，戦後高度経済成長期の上昇が著しいが，戦前の昭和恐慌下で生産を伸ばし，戦時体制が本格化するまで小波はあるものの，増加を続ける。なお，当該期に丹後で生産される織物は９割以上が縮緬であった。

しかし，丹後産地で国練が実施されると未精練の縮緬を仕入れて京都で精練を行い，販売していた京都縮緬商とは難しい関係が生じた。また，四大商店は丹後を支援し，丹後と直結して



注）丹後織物同業組合『組合史』1981 年の巻末資料により作成。
元データは反と m^2 が混在しているため，一反＝4.2 m^2 で換算し，m^2 で統一した。

図３　丹後における織物の生産数量（明治・大正・昭和）

縮緬を卸すようになると京都縮緬商とも微妙な関係になろう。この三者の軋轢を修復することが，染織祭発起の一因になったのではないだろうか。これを明確に述べた史料は管見の限りないが，染織祭創設を遡る最も古い史料では四大商店と丹後の津原が発起しており（第1章1【史料2】），また，染織祭の祭事調査委員を務めた猪熊浅麻呂の孫で，丹後の大手縮緬問屋から母が嫁いできた猪熊兼勝は「染織祭は丹後の人たちが一生懸命やった祭りだった」[42]という。この点については，今後さらに検討していきたい。

このように，京都染織業界では，高級品を製造して苦境にあえぐ西陣と，大衆向けの安価な関東織物・銘仙や安価になった高級品・縮緬を扱う室町問屋とでは，商況に大きな開きがあった。しかし，好況な室町問屋の内部でも，丹後縮緬をめぐって，京都縮緬商と染呉服商（前売問屋）の確執があった。染織祭が発起された昭和5年は，京都染織業界にとっては，① 西陣織物の不振，② 丹後縮緬の国練問題という二つの難題を抱えた時期で，この苦境を乗り越えていくために，業界を一つにするモノが必要だったのではないか。

3　京都市の思惑　―― 財政事情・大礼博覧会の開催・観光課の設置

これまで述べてきたように，昭和5年（1930）8月末の京都染呉服商の発案に行政が賛同し，翌年明けから染織祭は本格化していくが，とくに京都市とは最も深い関係を築いていく。ここでは，なぜ京都市が染織祭と深く関わっていくのかを検討する。

昭和5年の『国勢調査報告』において，「職業（小分類）別人口」では，京都市の有業者人口341,215人のうち，「紡織工業等ニ従事スル者」64,210人と「染色工・捺染工」20,269人だけでも計84,479人となり，有業者人口の24.8%を占める。ほかにも多数の染織関連製造者がおり，また，『国勢調査報告』には小売業や卸業の区分はあるものの，「呉服」「染織」等に限定した販売業者数はないので推測にすぎないが，おそらく，製造販売等で呉服関係に従事する人は有業者人口の半数以上を占めていたのではないだろうか[43]。

また，京都市の生産額は　① 織物類7315万円　② 被服及絹綿製品3065万円　③ 醸造物2336万円　④ 印刷製本2191万円　⑤ 絹糸及綿糸紡績2144万円，⑥ 晒及染物（賃金）1945万円，以下，⑦ 武具及玩具　⑧ 農産物　⑨ 飲食雑類　⑩ 金属製品と続き，繊維関連が上位を占めており[44]，冒頭の【史料1】でみたように京都市は「全国的にも世界的にも染織の都」だった。

このように繊維産業に比重が大きかった京都市の財政事情を探ってみよう。図4は「京都市の歳入」のうち，経済状況の変動を表しやすい「税収」の推移を追ったものである。地方税は1年遅れで徴収されるが，第一次世界大戦期（大正3～8年・1914～1919）に急激に増加し，終戦後の反動恐慌でやや減少するものの，再び，関西経済は大正12年の関東大震災で壊滅した首都圏へ物資を供給したためか，緩やかに増加する。そして，昭和に入ると一般には下降するが，

注）京都市企画部庶務課『京都市政史』下巻　京都市役所　1940 年 p197～199 より作成。

図 4　京都市の税収（1912 年・大正元～1936 年・昭和 11）（単位千円）

京都市では昭和 4 年の税収が急上昇している。

その理由として，昭和 3 年，京都御所で昭和天皇の即位大礼が挙行され，それに合わせて，京都市では昭和大礼博覧会を開催したことが大きい。

【史料 10】　我が国体の精華と産業の実情を世界に紹介し，且は財界極度の不振に陥つてゐた折柄，列強に於ける産業開発の情勢に鑑み，之が挽回の一策として大博覧会の開設を計画し，（略）当時，我国博覧会史上屈指の大博覧会と称せられたものである。

会期は九月二十日より十二月二十五日に至る九十七日間（略）入場者総数実に三百十八萬四千余名（略）本市産業開発上輝しき成果を収めてその幕を閉じた[45]。

開催の理由は財界の極度の不振を挽回するための一策として計画したとあり，97 日間で約 318 万人を集客した。明治 36 年（1903）に大阪で開催された第 5 回内国勧業博覧会には約 435 万人が来場し，国内で最も集客した博覧会とされるが，会期は 153 日間だったので，1 日あたりでは京都が約 3.28 万人，大阪が約 2.84 万人で，大礼博覧会が上回る。

また，新天皇の入洛が決まると，京都市では道路整備を進めて失業者を吸収し，市内のメインストリートでは店頭を改装した店舗も多かったという[46]。さらに，右田裕規によると，染織業者と呉服商らは，「御大典模様」と総称される図柄や「慶事に因んだ模様」の着物類を製作し，飛ぶように売れたといい[47]，博覧会以外にも，大礼の経済効果は大きかった。

このように京都市は即位大礼や博覧会を最大限に生かし，不況を乗り越えようとしたが，それらが終わると，その反動や，さらに昭和 4 年 10 月には世界大恐慌の発生も重なり，京都市の財政は急激に悪化していく。そのような財政状況のなかで，新たに浮上してくるのが「観光事業」であった。昭和 5 年 5 月，京都市は全国の自治体で初の「観光課」を設置した。設置の理由は，前月に政府が鉄道省の外局として「国際観光局」を置いたことに連動したものだったが，すでに昭和 3 年の昭和大礼事業を通じて観光振興は進みつつあった[48]。浜口内閣には観光

事業を　① 昭和恐慌下の経済効果の一助，② 外国からの観光客を受け入れ，国際親善を図る協調外交の一助にしたいという一石二鳥の思惑があった[49]。

さて，京都市議会では昭和５年度の予算審議において，以下のような意見が登場している。

【史料 11 ①】　昭和五年度予算審議　八木重太郎議員（2 月 24 日）

中央政府ニ於キマシテモ観光局ト云フモノヲ設ケテイロイロノ方法ヲ考ヘテ居ルト云フコトデアリマスガ，殊ニ我京都市ニ於キマシテハ最モ是等ノ中心ヲナス都市デアリマスルガ（略）今日ノ此予算面ニ付テハ何等之ニ対シテ計上サレテ居ナイ（略）財界不況ノ際ニハ殊ニ斯ウ云フコトガ我京都市ハ遊覧都市トシテノ上カラ見テモ是非必要ダト思フノデアリマス[50]

八木議員は中央に観光局が設置されることを受け，京都市は日本の観光の中心都市でありながら，ほとんど観光に関する予算を計上しておらず，財界不況の折，もっと観光業に力を入れるべきだという。観光課が設置される前ということもあり，「観光都市」という言葉ではなく，「遊覧都市」という言葉で議会では議論している。

その一方で，翌日，もっと産業に力を注ぐべきだと訴える議員もいた。

【史料 11 ②】　同　日暮正路議員（2 月 25 日）

兎角遊覧都市，市ノ面目，美術ト云フヤウナコトニ専念之ニ終始シテ居ラレルヤウニ思ヒマスルケレドモ，私ハ此遊覧都市ニ伴フ所ノ産業方面モオ考ヘニナル必要ガアリハセヌカト思フノデアリマス（略）西陣ノ織物ハ兎角振ハヌガ為ニ，桐生，足利ノ品ニ圧倒サレル，（略）市ノ理事者ノ監督ノ下ニ京都ノ特産品ヲ之ニ依ツテ市自ラ経営スルト云フ御意見ガアルカ否ヤ[51]

当時，大礼を終えた余剰金で京都市美術館の建設計画が進行していたことについて，日暮議員は遊覧都市の重要な要素である美術に京都市は専念しているが，それを支えている産業方面も考える必要があるという。西陣織物は振るわず，桐生・足利の商品に圧倒されており，京都の特産品を市が自ら経営する考えがあるかどうか市長に問う。それに対し，

【史料 11 ③】同　土岐市長の回答（同日）

今日京都市ノ特産品トシテ誇ルニ足ルベキモノハ漸次衰ヘテ行クト云フ傾向ガアルコトハ私共ノ常ニ憂慮シテ居ル所デアリマス（略）イロイロ美術工芸品ナリ，又西陣織物モサウデスガ，極ク優秀ナルモノハ製作致シマシテモナカナ売行ガナイノデアリマス（略）国家トシテ保護スベキデハナイカト云フ意見モアル，京都市トシテハ勿論ノコト出来ルダケノコトハ致サナケレバナラヌト思ツテ居リマス[52]

と，土岐市長は京都市の特産品がだんだん衰える傾向にあることを憂慮していること，美術工芸品や西陣織物が非常に優秀なものを製作しても売れないこと，そこで，国家として保護すべきではないかという意見もあり，京都市としては出来るだけのことをしなければならないと回

答している。

第２章１でも述べたように，当時，京都市にとって西陣織物の不振は大きな課題で，土岐市長は一般の失業対策は土木作業だが，西陣の救済には雑巾刺しを依頼していると議会で答弁しており，職人の救済策に苦心していた[53]。市議会は産業振興か，観光振興かで揺れており，京都市には産業も観光も両者を振興できる新たなモノが求められていた。

第３章　染織祭の展開　―― 第１回・第３回染織祭と女性時代風俗行列

京都染織業界はその内部に抱えた軋轢から業界を一つにできるモノ，京都市は産業と観光の両方を生かすモノを求めており，両者の思惑が一致したのが，染織祭だったのではないか。この点を本章では，実際に展開された染織祭を掘り起こしながら深めていく。

1　第１回染織祭　―― 大京都市誕生祝賀会に準じた行列

昭和６年（1931）４月11・12日，第１回染織祭が開催された。直前の４月１日には現在の伏見区・右京区・左京区など周辺の町村を合併して「大京都市」が誕生している。合併に際しては，すべての町村がもろ手を挙げて喜んだ訳ではなかったが[54]，１日から１週間，祝賀パレードや祝賀踊などが市内各所で繰り広げられた[55]。京都染織業界も，西陣織物商組合・京都染物同業組合・西陣織物同業組合・京都縮緬商組合・京都染呉服商組合など組合単位で参加した。その合併祝賀行事の流れを受け，同じ衣装を着用して第１回染織祭のパレードが行われたが[56]，第１回染織祭には，まだ女性時代風俗行列はない。

染織祭の第１日目は，岡崎公園グランドに染織祖神を祀った祭壇や大鳥居を仮設して祭典を行い，府知事（総裁）・市長（会長）・会頭（副会長）をはじめ，染織講社理事（参加組合の代表）らが出席した。平安神宮宮司を齋主に，祭典係の委員長には府学務部長，委員は府社寺課長・社寺課属をはじめ，賀茂御祖神社・賀茂別雷神社・吉田神社・宗像神社・下御霊神社・真幡寸神社・岡崎神社の宮司・社司が就任し，さらに神祇院京都支部からも１名が委員となり，京都の多数の神社が関わった。式次第は，午後１時から祭主以下参列者着席→齋主齋員着席→修祓→降神→神饌・幣物を供える→齋主祝詞→祭主祭詞→斎主玉串を奉り拝礼→齋員拝礼→祭主玉串を奉り拝礼→府知事，市長，会議所会頭，講社理事長，同評議員代表，来賓，参加団体代表の順で玉串を奉り拝礼→神饌を撤す→春庭楽奉奏→諸員退下であった[57]。

そして，第２日目には，朝９時から１日目の式次第から幣物の供え・祭主祭詞・春庭楽奉奏を除いた内容を再び執行し，午後，以下のような行列が京都市中を練り歩いた。

【史料 12】　染織祭行列順序（昭和六年四月一二日）

一，午後一時迄ニ京都府庁舎ニ集合

一，道筋＝午後一時京都府庁前出発，丸太町通へ，丸太町通ヲ烏丸へ，烏丸通ヲ四条へ，四条通ヲ祇園石段下へ，東山線ヲ二条通へ，二条通ヲ東へ，公会堂前ヨリ祭場ニ

一，行列

第一列

一番　祭事委員自動車

二番　幣物自動車

三番　齋員自動車

四番　祭主（京都市長）自動車　（＊佐上信一）　（＊は北野が補足，以下同）

五番　京都府知事自動車　（＊土岐嘉平）

六番　京都商工会議所会頭自動車　（＊大澤徳太郎）

七番　染織講社理事長自動車　（＊安川和三郎）

八番　染織講社常任理事自動車

第二列

市立第一工業学校装飾自動車　〔ママ〕二台

次ニ同校色染科機織科学生（徒歩）

一番　西陣織物商組合　屋台二台

二番　半襟〔ママ〕商組合・京都刺繍同業組合　屋台二台

三番　京都染物同業組合　屋台二台

四番　西陣織物同業組合　屋台二台

五番　京都縮緬商組合・京都浜縮緬商組合　屋台三台

京都生絹同盟会・丹後縮緬同業組合

六番　京都小売商連盟　屋台二台

七番　京都染呉服商組合　屋台三台

関東織物商組合（盛奨会）　屋台七台

八番　京染呉服悉皆同業組合　屋台二台

九番　京都木綿商組合　屋台一台

十番　白川水洗団　屋台一台

第三列

京都料理飲食業連合組合　屋台二台

伏見協賛団自動車　〔ママ〕二台

日活・松竹・帝キネ男女優乗車自動車　〔ママ〕五台

日本織物新聞社　屋台一台

京都市消防団　屋台一台

中外染織新聞社　　屋台一台

其ノ他

午後一時半ヨリ二時迄ノ間ニ於テ七遊郭ノ芸妓連七百三十五名揃ヒノ日傘，衣裳ニテ行列参拝[58]

行列は三つのグループに分かれ，第一列は府知事・市長・会頭・染織講社理事など祭りの主脳陣が自動車に乗車した。なお，行列の祭主は京都市長（染織講社会長）である。第二列は市立第一工業学校を先導に，染織関連13団体（組合）と京都小売商連盟が合併祝賀パレードと同じ衣装を着用して行進した（第3章2で詳述）。主に組合単位で1時代を担当しているが，国練をめぐって難しい関係になっていた京都縮緬商組合と丹後縮緬同業組合のように数組合で一つの時代を行列している場合もあった。さらに，第三列には京都市料理飲食業連合組合，伏見協賛団，日活・松竹・帝キネの男女優，日本織物新聞社・中外染織新聞社，京都市消防団などが続いた。この他に，午後1時半から2時の間，7遊郭の芸妓連735人が揃いの日傘で行列を参拝し，総勢で2000人に近い行列となった。この日と翌日の夜には大商店から提灯行列も出て市民も一緒に岡崎公園グランドで染織祭祝賀踊を楽しんだ（注58を参照）。

染織祭当日，『京都日出新聞』は1面トップで府知事・市長・会頭の弁を掲載した[59]。通常，ここには中央の政治記事が配置されるので，いかに同社が染織祭を破格に扱っていたかがわかる。ここでは，染織講社会長・京都市長土岐嘉平の弁を紹介したい。

【史料13】　京都の実体を雄弁に物語る産業祭

市民に最も関係深き染織に関する祭礼の見るべきものなきを遺憾とし今回時代祭に対立する染織祭を創設し染織を今日あらしめられたる諸神の御神徳に感謝しその遺徳を宣揚頌称して報恩反始の精神に基きその生業を礼賛謳歌して益々その途に精進せむとするの挙に出でた次第であります

時代祭と染織祭とが京洛の地に二大祭典として対立し前者は平安京をしのぶ史的式典として後者は生業を謳歌する産業祭として春秋に対立することは京洛の実体を最も雄弁に物語る祭典であると思ふのであります（略）[60]

土岐市長は，これまで市民に関係が深い染織に関する祭礼に見るべきものが無かったので，今回，時代祭に対立する祭りとして「染織祭」を創設したという。そして，染織業を生業と位置づけ，業界も市民もみんなで生業を礼賛謳歌し，ますます精進しようという。また，時代祭は平安京をしのぶ歴史の祭り，染織祭は生業を謳歌する祭りとして秋と春に対峙することが，京都の実体を物語るとも述べる。

2　第3回染織祭　―― 女性時代風俗行列の完成

このように第1回染織祭は，昭和6年（1931）4月の大京都市誕生祝賀行列と同じ衣装を着た参加組合の男性，飲食業・映画界・消防団・工業学校生などがパレードした。そして，第2

回染織祭の直前，翌７年４月１日の『染織日出新聞』創刊号には「昨年来染織講社祭事調査委員出雲路通次郎，関保之助，和田不二男，猪飼嘯谷，猪熊浅〔ママ〕麿，江馬務の六氏の手で考究の結果，上古時代から江戸時代に亘つておよそ八種の成案を見たので本年はその第一着手として平安朝時代の『やすらひ花踊』の行列を催すこと」[61] になったとある。第３回目に完成する上古から江戸時代にわたる８時代の女性時代風俗行列の成案はこの時点で出来ており，第２回目にはそのうちの平安朝時代の「やすらい花踊」が登場するという。

ところで，構想時に支配階級の「時代祭」に対して染織祭は「大衆祭」という議論があったことを第１章３で紹介したが，ここでは，大衆から女性へと変化している。その点について，明確に述べた史料はないが，おそらく，大衆の服装を中心にすると染織業界や京都市の懸案だった西陣織物や美術工芸など高級品の振興が出来ず，華やかさにも欠けるからではないか。また，戦前は男性時代装束のみが行列した「時代祭」と明確に差別化を図るためにも女性時代風俗行列となったと考えられよう。

さて，昭和８年（1933）４月９・10 日，第３回染織祭が開催され，２日目にいよいよ８時代にわたる女性時代衣装を京都の８花街の芸妓が着装し，下記のように市中を行列した。

【史料 14】 染織祭行列順序（昭和八年四月九日）

一，午後一時迄ニ京都府庁前ニ集合

一，道筋 ―― 午後一時三十分京都府庁前出発，丸太町通へ，丸太町通ヲ烏丸へ，烏丸通ヲ四条へ，四条通ヲ河原町へ，河原町通ヲ二条へ，二条通ヲ東へ，応天門通祭場正面へ

一，行列　（一番～八番は第一回と同じため，省略―北野による）

九番	上古時代（織殿参進の織女）	三台	京染呉服悉皆同業組合
十番	奈良朝時代（歌垣）	三台	京都染呉服商組合
十一番	平安朝時代（やすらい花踊）	三台	関東織物盛奨会
十二番	鎌倉時代（女房の物詣）	三台	京都縮緬商組合・京都浜縮緬商組合 京都生絹同盟会・丹後縮緬同業組合
十三番	室町時代（諸職の婦女）	二台	西陣織物商組合
十四番	桃山時代（醍醐の花見）	三台	日本染織物見本市協会・京都半襟商組合・京都刺繍同業組合・京都蚕糸商同業組合・京都木綿商京盛会・京都糸物同業組合・京都輸出友仙組合
十五番	江戸時代初期（小町踊）	二台	京都染物同業組合
十六番	江戸時代末期（京女の晴着姿）	三台	西陣織物同業組合[62]

□は今回から参加した組合（・および追い込みも北野による）

１番～８番は，第１回とほぼ同様に染織講社の主脳陣が自動車に乗り，その後を９番から 16 番まで８時代でそれぞれ（　）内のテーマを掲げた女性時代風俗行列が進んだ（写真 3）。８時代

（公社）京都染織文化協会所蔵・提供
上段（左から）；上古・奈良朝・平安朝，中段（同）；鎌倉・桃山（縦）・室町，下段（同）；江戸初期，江戸末期
写真３　時代風俗行列風景（８時代）

を８花街（島原・上七軒・先斗町・宮川町・北新地・祇園甲部・祇園乙部・中書島）が担い，各女人列の後に負担した組合員が男性装束を着衣して従った[63]。参加染織団体は，第１回が日本染織物見本市協会と13団体だったが，第３回は□をつけた京都蚕糸商同業組合・京都糸物同業組合・京都輸出友仙組合の３組合が加わり，16団体になっている。行列のルートも第２回には四条通から東大路通を北上したのが，河原町通に変更される。

衣装の完成後，昭和８年10月には祭事調査委員の出雲路通次郎・関保之助・猪熊浅麻呂・猪飼嘯谷の４名の編纂による『歴代服装図録一　染織祭篇』[64]（以下，『図録』と略す）が刊行された。出雲路と猪熊は有職故実研究者，関は武家故実研究者で，いずれも時代祭の委員も務め，大阪商工祭や神戸みなと祭における時代衣装の監修もしていた[65]。また，猪飼は京都美術専門学校（現京都市立芸術大学）で教鞭をとり，歴史画を専門としていた（第４章１で後述）。ただ，編者の中に構想発表段階でいた６人の祭事調査委員のうち風俗史研究家の江馬務と京都博物館（現京都国立博物館）の和田不二男の名前がない。

では，どのようにして，時代風俗行列の衣装は制作されたのだろうか。衣装は幾つかの段階を経て制作されたと考えられる。まず，柱となる８時代構想は誰が考えたのか。衣装が出来上がる昭和８年４月以前に出版された服飾史や風俗史の書籍から時代構成や参照資史料をまとめ

表１　大正末～昭和初期にかけて出版された日本服飾史関係書籍

筆者・書名・年代	時代区分または構成	女性の服飾に関する記述	主な参考史資料等（書籍中の名で表記）
桜井秀	総論		
『日本服飾史』	平安朝以前	【女官の服装（衣と裙）】	日本書紀
大正 13 年	平安朝の生活と服飾	女装界の概観（1）（2）【十二単，唐衣及裳，小袖，袴等】	日本紀略，西宮記，延喜式，山槐記，兵範記，今昔物語など
雄山閣	鎌倉及室町時代	【小袖の発達と袴の失墜・湯巻及薄衣の発達】	明月記，竹向日記，玉葉，看聞御記など
	江戸時代概観	御所風・御殿風【庶民服・帯の発達】	徳川幕府礼典録附録，守貞謾稿など
	【明治以降】	洋装の採用	
関根正直	太古	女装の衣と裳	日本書紀
『服制の研究』	上古前期		
大正 14 年	上古後期	女官の礼服・朝服，庶民の私服	衣服令，西宮記，薬師寺吉祥天女画像
古今書院	中古前期	延喜式に記載せる男女の正服	延喜式
	中古後期	女礼服の小変・唐衣と長袂礼服，男女の旅姿	西宮記，紫式部日記絵巻
	近古	十二単の称起る，【湯巻腰巻袴略す】	増鏡，源平盛衰記，石山縁起
	近世	御殿女中本式服，市井婦女礼服	守貞謾稿
	現代		
江馬務	固有風俗時代		
『日本服飾史』	韓風輸入時代	【上衣・裳帯・裳・領巾】	万葉集，皇大神宮儀式帳，古事記伝
昭和 3 年	唐風模倣時代	【穴師神社女神・神功皇后像（薬師寺）】	仁明天皇（833～50 年在位），最後の遣唐使
日本風俗史講座 24	国風発達時代	【唐衣・裳　小袖袴袿袴　掻取】	栄華物語，紫式部日記，女房装束抄，源氏物語
雄山閣	国風全盛時代	【小袖（身分差・形式・地質・紋様・染）】	彦根・松浦屏風，友禅研究，近世風俗史
江馬務	上古	【垂髪・上衣・裳・領布・履着用】	埴輪，古事記伝（おすひ），古事記，万葉集
『日本風俗史』＊	奈良朝	【女官礼服・朝服】	衣服令，正倉院御物
昭和 4 年	平安朝	【十二単・小袿等　小袖】	源氏物語絵巻，伴大納言絵巻
国史講座刊行会	鎌倉時代	【小袿・打衣・袴】	土蜘蛛草紙絵巻，春日験記
	室町時代	【商業風景，晴装束】	鏡割草紙抄，七十一番歌合
	安土桃山時代	【肩裾，小袖】	宇良神社資料，松浦家屏風
高橋健自	原始衣及胡服時代	女子の髪風　女子の著（着）物	土偶，古墳発掘品
『歴世服飾図説』上下	唐制模倣時代	女子の髪風　女子の著（着）物	薬師寺吉祥天画像，唐代女子遊楽図
昭和 4 年	内外制融合時代（上）	所謂「十二一重」　小袖袴	
思文閣	内外制融合時代（下）	壺装束　衣被ぎ　衆垂衣　庶民服	
	小袖中心時代	女子の髪風　打掛　腰巻　帯	
	（欧米制模倣時代）		
和田辰雄	衣服発生時代		女子埴輪土偶
『日本服装史』	唐制模倣時代	【女官（礼服・朝服）】	日本書紀，天寿国曼荼羅，神功皇后坐像
昭和 8 年	内外制融合時代	女子の服装（礼服・晴装束・壺装束）	日本紀略，長元礼服記，和名抄，栄華物語
雄山閣	国風勃興時代	女子の服装（湯巻・薄衣・腰巻・小袖）	玉葉，禁秘御抄，続史愚抄，竹向日記
	国風全盛時代	公家・武家（腰巻打掛）民間衣服（小袖）	近代女房装束抄，貞丈雑記，近世風俗史

注）筆者・書名・年代は各本の奥付，時代区分構成は目次より抜粋，女性の服飾は抽出分と【　】内は内容から追加。
なお，当該期には高橋健自『日本服飾史論』（大鐙閣　昭和２年）が出版されているが，男性のみのため，省略した。
また，史資料も主なものに限定した。
＊日本史の時代区分に準拠，風俗の性質により区分すると日本服飾史（昭和３）に同じ，服飾だけでなく，風俗全般を記述。

たのが表１で，時代構成については，江馬の『日本風俗史』[66] が最も近い。江馬は京都帝国大学史学科の第１期生で政治史中心の歴史学から風俗史学という新しい分野を拓いている[67]。ただ，昭和７年 10 月の時代祭の折，祭事委員を降り[68]，それに連動する形で染織祭の委員も辞めたと思われる。そのため，従来，江馬は染織祭と関係しないとされてきたが[69]，第１回染織祭を記録した『染織祭グラフ』の「序」を執筆し[70]，８時代構想を発表した『染織日出新聞』

表２　時代風俗行列の衣装（時代・テーマ・人数・参考資料・着装花街）

時代	テーマ	人　　数	主に参考とした資料	着装花街
上古	織殿参進の織女	16 人	髪型＝埴輪	島原
奈良朝	歌垣	20 人	薬師寺の女神像２体，正倉院御物	上七軒
平安朝	やすらい花踊	23 人	年中行事絵巻（別本巻三・安楽花）	先斗町
鎌倉	女房の物詣	22 人（女房 11・供女 11）	守袋＝四天王寺の什宝	宮川町
室町	諸職の婦女	13 人	七十一番職人歌合	北新地
桃山	醍醐の花見	18 人（上臈 6･侍女 10･童女 2）	北政所打掛（高台寺蔵），白練緯打掛（宇良神社蔵）	祇園甲部
江戸初期	小町踊（七夕踊）	16 人（踊子 10・付添 6）	還魂紙料の図	祇園乙部
江戸末期	京女の晴着	15 人（公家 5・武家 5・町方 5）	野村正治郎・吉川観方の所蔵品	中書島

注）関保之助・猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷編『歴代服装図録一』歴代服装図録刊行会 1933 年より作成。

創刊号の記事でも委員に名を連ねており，昭和６年６月に委員となってから辞任するまで確実に染織祭と関わっている。

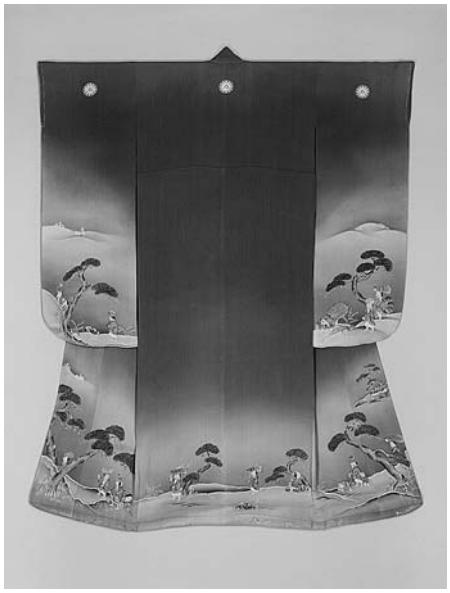
さて，次に『図録』から制作する際に参考とした資料をまとめたのが，表２である。先に述べた第一線の研究者が現存品・遺物・絵画・文献等をもとに考えた。祭事調査委員は８時代構想や各時代のテーマまでは関わったと思われるが，『図録』には「この服飾に関する調査上，野村正治郎，吉川観方，高田義男等諸君が，或はその所蔵を提供し，或はその研究を披瀝し」[71] たとあり，３氏の協力が大きかった。野村は古美術商・友禅研究家で，その所蔵品は現在，国立歴史民俗博物館に「野村コレクション」として収蔵される名品群である[72]。また，風俗研究家で松竹衣装顧問等をしていた吉川も膨大な小袖や裂のコレクターで，その収集品は，現在，京都府立京都学・歴彩館（管理は京都府京都文化博物館），奈良県立美術館，福岡市博物館に収蔵されている[73]。なお，筆者は吉川が単なる協力者ではなく，実際の衣装の提案や制作に大きく関わっていたと考えており，今後，先の江馬と共に改めて検討したい。

さらに，高田は宮中内蔵寮御用装束調進方高田家の家業を受け継ぎ，宮中装束の製作に携わる高田装束研究所を主宰しており[74]，戦前に正倉院宝物を参考にできたのはそのためであろう。そして，制作者として高田茂・荒木伊助・松下季静が染織業者と力を極めたことで短期間にできたという。３氏はいわゆる装束店で，おもに織物を得意としており，友禅染など染め物はどこかへ依頼したと考えられるが，その委託先の詳細は分かっていない。

これらの衣装については，服飾史・染織史の領域から切畑健が「史実にしたがって考証され，実際の遺例の伝えられている場合はまた忠実に再現」[75] されたとし，また，小山弓弦葉は「京都の高度な染織技術を記録」「現在でも通用する実証性の高い復元衣装」[76] と述べ，実証性や復元技術の高さを評価している。衣装や道具類については『図録』を参照願いたいが，ここでは１例だけ，参考とした資料と制作された衣装の比較をしておく。

写真４は江戸時代末期の町方の娘が着用した大原女を描いた小袖である。今日では２氏が述

【A，参考とした資料（江戸時代）】
A，福岡市博物館所蔵・提供。吉川観方が所蔵していた小袖。



【B，染織祭で制作した衣装（昭和８年）】
B，公益社団法人京都染織文化協会所蔵・提供。

写真４　江戸時代末期「京女の晴着姿」（町方）　参考資料と制作衣装の比較

べたように復元や再現できることが高評価となるが，実は全く同じ小袖を制作していない。袖や裾の部分のぼかしは参考とした資料Ａより，制作された衣装Ｂの方が自然で，化学染料を使用して実現した。制作にあたった職人たちは現存品を研究し，より良くなるよう，自分たちの持てる技術を付加したのではないか。山邊知行は衣装が制作された昭和初期を京都における近代染織の頂点の時期[77]だったという。その理由を西洋から機械・化学染料・デザイン等が急激に流入して混乱した明治期を脱し，それらを使いこなせるようになったとする。

この衣装制作の意義は，① 作業を通して職人が近代以前のデザインや技術を学び，さらに近代の成果を加えて継承したこと，② 恐慌下に求められた大衆向けのモノづくりは関東産地等でもできたが，考古から現在まであらゆる時代の衣装を制作し，芸妓が着装した行列で日本女性服飾史を初めて可視化したこと，③ 染織の技術力，京染呉服商の財力，業界・行政・花街・研究家等の人力など多くの「京都の力」を示したことにあった。

3　四大祭の一つに　―― 染織講社の財政・京都市の補助金・祭りの広がり

このように多数の「京都の力」を結集して８時代・143 人分の時代衣装と道具類を制作した昭和８年度の染織講社の収支は以下のようになっていた[78]。ただし，支出は予算，収入は実収のため金額に大差を生じている。

支出（予算）34588 円の内訳をみると，服装新調費補助 21560 円で６割強を占めている。新

【支出（予算）】

事務費・会議費	800 円＋600 円	
式典費	1950 円	
祭事費	7450 円	
服装新調費補助	21560 円	新調スベキ服装代総額 53900 円 上記の 2 割引＝43120 円の半額
雑支出・予備費	1545 円＋683 円	
計	34588 円	

【収入（実収）】　講社員分担金 17540 円

補助金	11300 円	京都府 800 円・京都市 10000 円・会議所 500 円
寄付金	23100 円	3 百貨店 500 円・13 団体 22600 円
雑収入	3304 円	衣裳賃貸料（白木屋・髙島屋等）
計	55244 円	

（□は北野による）

調スベキ服装代は 53900 円，その 2 割引きの 43120 円の半額 21560 円が計上された。なぜそのような金額が算出されたのか。それに対し，収入（実収）は 55244 円となっている。補助金 11300 円のうち京都市が 1 万円を寄付して突出しているが，染織講社の参加団体は通常の講社員分担金 17540 円に加え，13 団体で 22600 円を寄付しており[79]，収入の 7 割以上を染織業者が負担している。

予算段階で想定した新調スベキ服装代の 2 割引きの半額という補助では足らず，例年にない寄付金が 13 団体から集められたのではないか。それでも，残りは制作した職人たちが負担したか，依頼した組合が負担して職人に支払ったのか，あるいは，両者で負担したのか，いずれにしても，染織業界全体で負担しており，祭りを財政面で支えたのは業界であった。

ところで，なぜ，京都市は，府の 800 円と比べ，破格の 1 万円を補助したのだろうか。京都市は染織祭の主体・染織講社に対し，昭和 6 年は 500 円，昭和 7 年に 5000 円，昭和 8 年に 10000 円，以後，昭和 15 年まで 5000 円を補助している[80]。

昭和 7 年には「染織講社費補助ニ対シテ四千五百円ヲ増加致シマシタ，是ハ染織祭ナルモノヲ昨年ヨリヤッテ居ラレマスガ，観光都市デアル京都市トシテ最モ相応ハシキ一ツノ行事デアルト考ヘテ，他ノ斯ウ云フ祭行事ニ対シテ補助シタル例ニ鑑ミテ四千五百円増加スルコトヲ適当ナリ」（―は北野）[81] と観光都市である京都市として最もふさわしい一つの行事であるという理由で歳出臨時部の「勧業費」[82] から支出している。

その補助金額はこういう祭行事の例に鑑みたというが，具体的な祭りの名前は示されていない。ちなみに同年，市は祇園山及鉾維持修繕費補助に 3345 円，平安神宮時代祭祭具費補助に 7500 円を「神事費」から補助している[83]。祇園祭や時代祭は「神事費」，染織祭は「勧業費」ということからも，産業振興・観光振興であったことは明白だった。

さらに翌 8 年，京都市は「染織講社費補助ニ対シテ五千円ヲモウ五千円殖ヤシテ一万円ト致

マシタ，本年ハ衣裳ヲ新調シテ四万円以上各組合ガ負担致シテ居リマスノデ，特ニ京都市ノ補助ヲ倍額ニ致シマシタ結果来年度ハ市ノ補助ヲ激減シテ差支ナイコトニナッテ居リマス」[84] と衣装新調に組合が4万円以上の負担をしているため5000円から1万円へ補助金を倍増するが，来年度は激減するという。

この補助金に対して，市議会では西尾喜三郎議員が「染織祭等ニ五千円ヲ補助シテオ祭騒ギヲスルコトハ大変京都市ノ誇リノヤウニナッテ居リマスガソレモ結構デアリマスルケレドモ，京都市トシテノ記念日ヲ設ケラレタラ如何カト思ヒマス」[85] と述べている。染織祭に補助することは「京都市の誇り」のようになっており，さらに記念日を設けたらどうかと提案していることからも，市議会でも染織祭への助成は支持されていた。

このように京都市が祇園祭や時代祭と同等，いやそれ以上の補助金を支出した染織祭の観客数を『京都日出新聞』から拾ってみると，約30万人（昭和7年）[86]，数十万人（昭和9～11年）[87]，市電の乗客は倍の50万人（昭和12年）[88] など，大きな集客を生んでいた。ちなみに祇園祭は平成27年（2015）から前祭と後祭に分かれて開催しているが，平成28年には前祭を約19万人，後祭を約10万人が見物しており[89]，染織祭の観客数は近年の祇園祭に匹敵していよう。

この集約力に京都の多くの業界が目をつけた。京都博物館（現京都国立博物館）では，昭和6年には染織祭を含む2週間で「京都染織名品展」を開催し，現在では考えられない名品の数々を展示した[90]。また，第1回染織祭では女性時代風俗行列がまだなく，松竹・日活・帝国キネマの映画会社の俳優や京都料理飲食業連合組合が行列に参加している。第3回以降は女性時代風俗行列がメインとなるが，第6回（昭和11年）には四条繁栄商業組合（四条通の小売商組合）や京都広告協会が協賛団体行列として加わっている[91]

同じく日本織物新聞社・中外染織新聞社・京都日出新聞社も行列や紙面で支援している。とくに京都日出新聞社は，第1回目には1面トップに染織祭の記事を掲載しているは異例の扱いであり，さらに昭和7年4月1日には『染織日出新聞』を創刊する。業界紙が増えること自体，染織業界が拡大していた指標といえる。この他，専売公社では江戸時代初期の小町踊を箱に描いたタバコ（銘柄は「光」）を，京都中央郵便局では記念スタンプを発行した[92]。第1回染織祭当日の京都駅の収入は前年同日より3000円増加し，市電も花電車を走らせ，交通業・飲食業・宿泊業・遊興業など多くの業界に経済効果が波及した[93]。

第2章1・2でみたように染織業界は西陣織物と関東織物・染呉服などでばらつきがあったものの，大衆向け商品を販売することで昭和恐慌下でも業界全体では景況は良かった。しかし，京都市の税収は昭和大礼後の昭和5，6年頃には減少しており（第2章3，図4），産業は全体的には低迷した。そのため観光課を設置した京都市が染織業界の財力をテコに染織祭を観光事業の一つとして成長させようとしたことが，次の点からもうかがえる。

京都市の観光案内『京都名勝』の口絵写真では染織祭・葵祭・祇園祭・時代祭の四つの祭り

京都市観光課『奉祝紀元二千六百年』1940年　京都府立京都学・歴彩館所蔵。

写真5　古典京都の誇る四大祭

を並べ[94]，各祭りの季節には著名祭事ポスターを製作し，近畿地方を中心に中部，中国地方の一部へ配布した[95]。さらに『奉祝紀元二千六百年』と題する京都市観光課のパンフレットには「古典京都の誇る四大祭」として，それぞれの祭りの写真と簡単な紹介がされている（写真5）[96]。一方，民間の観光案内『京都大展観』でも冒頭に口絵写真を入れ，その注釈に「京都四大祭の一つ染織祭」[97] と記している。公民双方から，京都三大祭に染織祭を加え，四大祭にしようという気運が醸成されていった。

第4章　染織祭の変質　―― 戦時期・戦後復興期の活動

1　日中戦争下の活動　―― 各種展覧会への要請

昭和6年（1931）に創設された染織祭は，昭和8年には女性時代風俗行列が加わり，集客性を増し，昭和10年代には，「四大祭の一つ」とまで謳われるようになっていた。しかし，昭和13年の第8回染織祭は「時代衣裳行列ハ日支事変ノ関係上見合セリ」[98] とあり，日中戦争開始（昭和12年7月7日）の翌年から行列は自粛された。以後，行列は復活することなく，1日目の祭典（祭祀）のみが継続することになる。

第8回染織祭は，昭和13年4月8日，午後1時から岡崎公会堂前広場に社殿を設け，講社社員1500名や関係者で祭典を執行し，午後2時から市勧業館の2階で，時代衣装の一部，桃山時代「醍醐の花見」を展示公開した[99]。翌14年には4月8日に岡崎公園グランドで挙行し，8・9日の両日，大礼記念京都美術館（現京都市立美術館）で，染織祭委員の猪飼嘯谷が描いた8時代女性時代風俗画と男装画の展覧会を開催した[100]。猪飼は京都画壇の大家である幸野楳嶺門下の四天王のひとりで，歴史画の第一人者の谷口香嶠に師事し，京都市美術工芸学校（現京都市立芸術大学）を卒業後，京都絵画専門学校（同）で教え，昭和5年宮内省の命により「大正天皇御大礼絵巻」を制作[101]，同9年には京都市の依頼により明治神宮聖徳記念絵画館にある明治天皇「即位礼」を描いている[102]。

このように行列の中止後は，染織講社主催での展覧会開催のほかに，他のイベントへ衣装を貸し出しているが，これは当初から行われている（表3）。昭和8年には衣装完成から2か月後，死者不明者14人・負傷者100人以上という大火災を乗り越えた東京日本橋・白木屋百貨店のグランドオープンを飾った[103]。これを端緒に主に全国の百貨店や呉服店などへ貸し出され，販売を促進した。ただ，昭和10年の丁子屋百貨店への貸し出し，さらに昭和15年になると衣装は違ったイベントから求められるようになる。

京城（現ソウル特別市）にあった丁子屋百貨店の「日本内地古代風俗展覧会」の借用書には「朝鮮在住ノ内鮮人ニ未ダ識ラザル日本内地特有ノ古代風俗或ハ遺風ノ変遷状況ヲ最モ適格明瞭ニ且ツ興味的ニ認識セシメ（略）」[104] とあり，日本特有の風俗の変遷を知らせる役割を担っ

表3　主な衣装貸出先リスト

年　度	内　容	賃与料金	場所	貸出先
昭和 8 年度	8 時代全部	2,000	東京	白木屋
	同	1,000	大阪	髙島屋南海支店
昭和 10 年度	8 時代 10 着	300	京城	丁字屋
昭和 11 年度	8 時代 24 着	150	大阪	伊藤萬商店
	桃山 11 着	350	福岡	岩田屋百貨店
	平安 10 着	150	同	同
	8 時代 56 着	500	京都	三越京都支店
昭和 12 年度	8 時代 42 着	500	大阪	髙島屋大阪支店
	桃山 11 着	200	神戸	大丸神戸支店
	8 時代 25 着	300	東京	白木屋
	8 時代 40 着	500	大分	一丸百貨店
	8 時代 25 着	500	福岡	田屋呉服店
昭和 14 年	5 時代 23 着	500	大阪	大丸大阪本店
昭和 15 年	2 時代 5 着	200	京都	松坂屋京都支店
	3 時代 10 着	500	福岡	玉屋呉服店

注）（公社）染織講社「衣裳貸与台帳」協会文書 3-3 より作成。

た。さらに日中戦争が長期化するなか，神武天皇即位から 2600 年にあたるとする昭和 15 年（1940）には，各地で行われた紀元二千六百年記念行事にも貸し出される。

まず，1 月 9～28 日，東京上野の松坂屋で「我等の生活」展覧会が開催される[105]。紀元二千六百年奉祝会長公爵徳川家達が染織講社会長京都市長市村慶三へ宛てた依頼状とともに残る「衣装借用願」の別紙によると，展覧会は同奉祝会が主催，内閣紀元二千六百年祝典事務局・内閣情報部後援，関保之助・斎藤隆三が顧問を務めた。その趣旨は「八紘一宇ノ精神ヲ以テ一貫スル国史ノ成跡ヲ回顧シ現代ノ盛時ヲ謳歌シ日本民族ノ特殊性ヲ把握シ愈々国民的自覚ト感激トヲ深カラシメントス」[106] とあり，パノラマ・ジオラマ・立体絵巻・絵画・写真・参考資料等を用いて，人々に見える形で国史・民族の特殊性・国民の自覚を訴えようとするものだった。「歴史に現れた生活風俗」の展示のうち，「奈良朝の風俗（天平の染織品を作る婦人達）」として上古の織殿織女 1 体と奈良朝の歌垣 4 体が貸し出される[107]。しかし，織女は上古のものだけで，奈良朝の衣装は正倉院宝物等の染織品を参考に制作された朝廷に仕える女官の姿を現わしており，本来の意味とは異なった形で展示されることになった[108]。

また，5 月 7～15 日に，京都日日新聞社が主催し，京都駅前の丸物百貨店で開催する「服飾維新展覧会」へも貸出の要請があった。借用願によると上古・天平飛鳥・奈良・平安・鎌倉・足利の各時代から 1 点ずつを展示したいとあるが，天平飛鳥という時代区分は染織祭の女性時代衣装にはない。その趣旨には「服飾就中染織工芸の文化的意義を強調しさらに文化と総力戦争との関係を明かにして京都業界の動向を示唆せんとす」[109] とある。古代裂をはじめ，各時代の代表的工匠が制作した品は高貴なる文化的価値を誇るものとして展示され，日本文化の高さ

が鼓舞された[110]。さらに10月13～22日，京都市主催「紀元二千六百年奉祝　日本文化と京都大展観」（於：大礼記念京都美術館，現京都市美術館）にも8時代の衣装と付属品一式の協賛を求められた[111]。

このように日中戦争の開始により女性時代風俗行列を自粛すると主催あるいは衣装貸出による展覧会などで，一般市民の前に登場することとなった。当初の百貨店や呉服店の販売促進から，やがて，紀元二千六百年奉祝記念関連行事では日本の歴史・風俗・文化を顕現化し，鼓舞する役割を担っていった。

2　太平洋戦争下の活動　―― 苦悩する祭典（祭祀）の継続と衣装の保管

日中戦争が長期化し，日米関係が悪化していた昭和16年（1941）になると，染織祭に新たな動きが起こってくる。行列の中止後も祭典のみ継続していたが，当日，平安朝時代のやすらい花踊を先斗町の芸妓が奉仕する「奉納踊」[112]という形が登場する。

会場も昭和15年の第10回染織祭までは岡崎公園グランドに社殿を仮設して行われたが[113]，16年には市公会堂横となり[114]，以後，点々と変わっていく。そのためか，昭和15年度から講社の財政に「神社建築費衣裳補修費積立金」が設定されている[115]。

そして，昭和16年12月8日に太平洋戦争が開戦すると，翌17年の染織祭では市勧業館で挙行後，戦勝祈願祭を執行し，江戸時代初期の小町踊を奉納した[116]。染織祖神に感謝という本来の目的に戦争の勝利を祈願するという意味が加わり，「戦勝踊」という名称になっている。祭典そのものも，行列を自粛し始めた昭和13年には1500人の染織講社員が参列していたが[117]，昭和17年には200人へと大幅に縮小した[118]。18年には元市公会堂本館跡に仮設して祭典を挙行，やすらい花踊が戦勝踊を務めた[119]。さらに19年になると戦勝踊もなくなり，会場も市公会堂2階となり，それまで20あった式次第から5つが消えた[120]。

行列の自粛，祭典も縮小するなかで，昭和18年10月5・6日には市公会堂本館2階を全面使用し，1日目には上古・奈良朝・平安朝・鎌倉の4時代（81着），2日目には室町・桃山・江戸初・江戸末の4時代（46着）で虫干しを兼ねた展覧会を開催し[121]，19年10月にも虫干しが企画されている[122]。そして，東京や大阪が大空襲に見舞われた直後の20年4月にも平安神宮神幸殿で前年同様の祭典を挙行し[123]，戦時下においても途絶えることなく，祭典（祭祀）のみを継続した。

ところで，日中戦争が長期化し，時代風俗行列の自粛が続くなか，昭和16年6月から染織講社理事会では時代衣装の保管場所について議論を重ねている。保管場所を市に依頼したが適当な場所が見つからず，市勧業館の敷地内に倉庫を建築する案が出たが，「セメントノ配給六ケ敷少量ナレバ商工省ニ交渉シ何トカ配給ノ途モナキニアラザルモ何分多量ノモノ要スル」[124]ので難航した。

では，なぜ，戦時下の物資が不自由になるなかで，保管倉庫の建築が必要だったのか。「本講社所有ノ染織祭時代行列衣裳ハ去ル昭和七年数万円ヲ投ジ新調セシモノニシテ示〔ママ〕来製作者三商店ニ寄託保管契約ヲ締結シ（略）三商店中一商店ハ保管場所完全ナルモ他ノ二商店ハ不完全ト認ルルニヨリ（略）一朝火災ノ場合ヲ予想スルニ火災保険契約ノ如何ニ不拘右衣裳中ニハ再ビ調製不能ノモノ多数有之候」[125] とあり，① 数万円を投じて新調したこと，② これまで衣装は制作の指揮をした高田・荒木・松下の 3 商店に委託して保管契約をしてきたが不完全であること，③ 万一火災になった場合，火災保険があったとしても，衣装中には再び制作できないものが多数あることの 3 点が理由であった。

ところで，「再ビ調製不能」とはどういうことだろうか。一つには，すでに消えていった技法があり，それを復活したことがある。その一例として『図録』によると，江戸時代末期の町方衣装 2 点の襦袢には「玉糊染」という「数十年来殆んど行われない」技法[126]が用いられた。玉糊染とは卵白を加えた糊で防染する方法で，卵白の凝固作用を利用した[127]。また，戦時下ということもあり，制作された時点で潤沢だった職人や原材料等の不足も想像し得る。そして，19 年 12 月の理事会からは衣装の疎開が議題に上る[128]ことからも，衣装の貴重性・重要性を認識していたことが察せられよう。

3　戦後復興期の活動　―― 時代祭への要請・染織講社の解散

このように染織祭は日中戦争の開始後，昭和 13 年（1938）から女性時代風俗行列を自粛したものの，染織講社は祭祀を継続し，衣装は展覧会・虫干し・奉納踊・戦勝踊などの機会を作って公開しながら，疎開の議論まで登場し，何とか保存する努力を続けた。幸い京都は大きな戦災を受けることがなく，衣装は守られた。

その衣装が，再び，京都市民の前に登場するのが，昭和 21 年（1946）10 月の時代祭であった。染織祭の創設時，ライバルとして意識した時代祭も昭和 19 年から行列を止めて居祭となっていた。今回も行列はないものの，22 日の時代祭を中心に前日祭・後日祭を含め，神楽・舞楽・和洋音楽演奏・能狂言等など[129]に加え，染織祭の歌垣（奈良）・やすらい花踊（平安）・小町踊（江戸初期）の 3 時代を神賑行事として奉納したいという依頼を平安神宮から受ける[130]。戦時下の昭和 16 年から奉納踊・戦勝踊が行われてきたのを染織祭・祭祀の齋主である平安神宮は周知していた。

『京都新聞』も「時代祭（略）豪華な奉納踊り」[131]，「妍競ふ奉納踊り　時代祭　豊穣の秋壽ぐ」の見出しで「境内は参拝客のフラッシュ，カメラのシャターをきる進駐軍将校の姿が多数散見せられるのも“民主神道”が描く和やかな風景である」[132] と報じている。進駐軍将校が多かったのは，昭和 27 年まで岡崎公園のほとんどの施設が進駐軍に接収されていた[133]ためであろう。この女性時代衣装の奉納は平安神宮では「時代踊」と名付け，権宮司磯貝博が「時代踊

は非常なる反響を呼び詢に感激罷在次第に御座候」[134] と述べており，翌 22 年の時代祭でも行われた[135]。

ちなみに，「時代祭（略）豪華な奉納踊り」の報道と同じ紙面には「正倉院御物展観　あすからひらく」[136] の記事が並ぶ。敗戦で傷ついた日本人を癒し，自信を取り戻してもらおうとこの時から始まったのが「正倉院展」だった。生活がままならないなか，華やかな時代衣装をまとった芸妓の踊りも，京都人には同様の役割を果たしたのではないだろうか。

そして，昭和 25 年（1950），7 年ぶりに時代祭の行列が復活する。前日の新聞には「特に本年は時代行列初の試みとして時代婦人列（三列）も加わりこれまた平和日本の祭礼にふさわしく話題をにぎわしている」[137] とあり，戦前は男性装束のみの行列だったが，再開にあたって女人列を加えることが絵入りで紹介されている。この再開にあたって猪熊兼繁（京都大学）・江馬務（京都女子大）・吉川観方らが時代考証を担当した[138]。第 3 章 2 で述べたように吉川は染織祭の風俗衣装に資料提供や制作協力した人物で，猪熊兼繁は父の浅麻呂を引き継ぎ，江馬は染織祭の創設時には調査委員をしており，いずれも染織祭とは関係の深い人物であった。

こうして昭和 25 年の時代祭には染織祭から，やすらい花踊（平安；23 名・先斗町），女房の物詣（鎌倉；22 名・宮川町），醍醐の花見（桃山；18 名・祇園甲部）が加わった[139]。「七年ぶりに沸く　人出も未ぞ有の時代行列」「都大路に風俗絵巻　七年ぶりに時代祭行列」「観客は約 50 万人」[140] などの見出しで報じられ，非常に賑わったことがうかがえる。しかし，昭和 28 年，時代祭が新たな女人列の設定と衣装制作を行うと再び，染織祭の衣装が参加することはなかった[141]。このように戦後復興期には女性時代衣装は時代祭と関わりながら，人々の前に登場したが，祭祀も本文末の〈付表 1　染織祭年表〉にあるように，行列の自粛後，戦時・戦後復興の混乱期においても規模が縮小するものの継続した[142]。

その後，染織祭はどのようになっていくのだろうか。昭和 25 年（1950）7 月 1 日，26 年 5 月 17 日の染織講社理事会では，今後の染織講社と衣装の所属について協議している。そして，① 染織講社の再検討をなし，広く民間団体にする，② 構成委員も染織業界の代表者並びに会費並びに負担力のある業者の加入をなす，③ 染織衣装の所属を明らかにする，④ 衣装は講社，市，奉公会，業者のいずれも所有権を有して居らず，この際，所属を織協とする事も考えられるという議論がなされた[143]。

要するに①②は講社の組織と会員を業界以外にも広げることであり，それは当時の祇園祭でも同様の方針がとられたように，業界の混乱が財政を逼迫させていたためであろう。その祇園祭を中心で支えたのも，山鉾町の範囲からわかるように染呉服商たちであった[144]。また，③からは衣装の所蔵者が明確ではないこと，④で新たに衣装の所有権者として「織協」が挙がる。その正式名称は「京都織物卸商協会」で，染織祭創設時の中核となった京都染呉服商組合・京都縮緬商組合・京都半襟商組合・京都木綿商組合などが統合された卸売商の団体である。いわ

ゆる「室町問屋」と呼ばれる人たちが属しており，西陣織物製造業者や西陣産地問屋などは含まれない。

指名を受けた織協（会員総数200名）では昭和26年5月28日の第4回通常総会で，「染織祭衣裳譲渡の件」について，議長は「過くる年華々敷染織祭を催した際調製された現今では容易に得難い貴重なる時代衣裳がある，（略）京都市と染織講社委員に於て協議した結果保管，修理，利用等一切の条件を含めて織協に無償譲渡するのが最善の処置であるとの結論に達し関係者から譲渡と交渉を受けたから理事会は之れを譲受けの件承認した」[145] と報告した。「現今では容易に得難い貴重な時代衣裳」であることが，譲渡承認の理由であった。

そして，昭和26年7月13日，衣装は染織講社から織協へ引き継がれ[146]，その後，改組した京都織物卸商業組合（以下，「織商」と略す）の所有となり，現在は織商の関連団体である公益社団法人京都染織文化協会が143人分の服具を保管している。

お　わ　り　に

おわりにあたり，全体のまとめと今後の課題，染織祭の意義について考えていきたい。まず，染織祭について，以下，簡単にまとめ，今後の課題をあげる。

① 主体：染織講社：京都府・市・会議所，日本染織物見本市協会ほか業界組合（団体）

② 期間：昭和6年（1931）～昭和26年（1951）（染織講社主体による）

③ 目的：染織祖神への感謝，京都染織業界内部の問題克服，京都市の産業観光振興

④ 時期区分・祭りの内容：

【1期：昭和　6～12年】祭祀＋行列，産業観光振興

【2期：昭和13～20年】祭祀＋展覧会への貸出，戦時体制への協力

【3期：昭和21～26年】祭祀＋時代祭に協力，京都人の癒しと自信の回復

⑤ 祭祀（祭典）と時代風俗行列（第3回～第7回，昭和8～12年）

①主体は染織講社という公民合同の組織だったが，もともと祭りを発起したのは染呉服商（問屋）で，京都染織業界が経費の大半を負担していた（第3章2）。しかし，京都市の補助金は業界以外では最も大きく，とくに協会文書には染織講社会長だった京都市長宛のものも多く，京都市商工課には「染織講社係」があり[147]，事務処理をしていた可能性が高い。さらなる検討を要するが，民が発起・出資・活動，それを公が助成した形であろう。

②期間は，昭和5年8月末を発端とし，秋以降に行政が絡み，染織講社を組織し，昭和6年4月に第1回を開催（第1章1・2），昭和26年の染織講社の解散までとする。それ以降は，京都染織業界や行政などを包含した組織であった染織講社から染呉服商を中心とする織協単体へと主体が変わるため，分けて考えた方がよいと思われる。戦後復興期，染織講社解散後の動

向については不明な点も多く，今後の課題としたい[148]。

③ 目的については，表向きの趣意書や規約では，「染織祖神への感謝」とあるが，第２章でみたように京都染織業界と京都市，それぞれの思惑が絡む。京都染織業界は昭和恐慌下で西陣織物のような高級品は低迷するものの，関東産地の安価な銘仙や高級絹織物縮緬の低価格化などを背景に購買層を大衆に広げた染呉服商（問屋）が非常に好調だった。しかし，室町問屋内部は丹後縮緬の流通をめぐる軋轢も生じていた。また，昭和５年に日本初の観光課を設置した京都市は昭和３年の大礼や博覧会を経験してイベントによる経済効果を周知しており，恐慌下の産業振興と観光振興という二つの側面から染織祭を支援した。

④ 祭りの内容によって時期区分すると１〜３期に分けられ，本稿では主に１期を中心に検討したが，２期・３期と変質していく。まず，１期は祭祀と行列を柱に多くの観光客を集める観光振興，時代衣装の制作は京都染織業界の産業振興になった。続く２期は戦時体制下で行列は自粛され，祭祀のみとなったが，百貨店を中心に各種展覧会へ衣装を貸出した。ただ，戦争が進行するなかで，衣装は日本文化の鼓舞を求められ，今日から見れば，戦時体制への協力になっていった。３期は戦時下で祭祀の折に時代衣装が奉納踊・戦勝踊として登場していたことから時代祭へ参加を求められ，戦争で荒廃した京都人の心を癒し，自信回復を担ったのではないか。今後，２期・３期についてはさらに調査を進めていきたい。

⑤ 祭祀（祭典）と時代風俗行列については，第３・４章でその実態を紹介した。祭祀については，本稿では染織祖神の設定や染織祭当日の模様，戦時下での動きなどを触れたにすぎない。協会が所蔵する昭和 11 年の映像にも，時代衣装に身を包んだ芸妓たちが，岡崎公園グランドに仮設した社殿で遥拝する姿が映る[149]。もし，染織祭が単なる販売促進イベントなら，なぜ，戦時下で行列を自粛した際に祭祀も一緒に止めなかったのだろうか。なぜ，戦時期にあれほど継続することに尽力したのかという疑問が残る。祭祀を含め，染織祭の精神的な側面についても更なる調査検討を要する。なお，本稿では筆者が記述する部分では染織祖神へ感謝する神事を行っているので「祭祀」を用いているが，染織講社の史料では主に「祭典」となっている。この用語についても実態を深めていくなかで統一する必要があろう。

また，時代風俗行列については，第３章２で衣装の構想者・協力者・制作者，参考資料などを提示し，京都の技術力・財力・人力があればこそできたものであり，集客性が高く，市民へも浸透しつつあったことを明らかにした。本稿では行列の主役となった花街との関係は解明できていないが，長崎詔子によると時代祭の平安踊に芸妓の参加構想があったが実現しなかったことが染織祭に引き継がれたのではないかという[150]。他にも江戸時代からあった祇園ねりものなど，どのような行列から影響を受けたのか[151]，また，逆に戦後の祭りの行列に女人列を加える動きを促進した点[152]，その後の衣装行列への影響[153]，日本服飾史に与えた影響については，今後，分析していきたい。

このように多くの課題を残しながらも，本稿では，これまで，歴史学からの研究がなかった染織祭について，曲がり形にも，その全容の解明を試みた。その上で，最後に，染織祭の意義を述べたい。染織祭は，染織業界・行政のみならず，京都の多くの業界が結集した祭りで，戦前の『京都市政史』や市の観光案内『京都名勝』等には三大祭とともに染織祭を支援し，四大祭の一つとする記述も見られる。しかし，戦後，編纂された京都市『京都の歴史』第9巻には全く登場しない。染織業は当時の京都の基幹産業であり，20年余を駆けぬけた染織祭の歴史は，短命ではあったものの，恐慌・戦争・戦後という混乱した京都の歴史の一側面を描いている。染織祭を京都の歴史に加える必要はないのだろうか。

また，同書のなかで，昭和初期の「西陣・室町」について執筆した藤田貞一郎は，昭和5年末の室町問屋筋が好況であったことを指摘し，その理由を「購買力において不況にもあまり動じることのない，中産階級たるホワイトカラー階層の比重の増大」[154] であると述べる。この点は染織祭の創設を担った染呉服商（問屋）を分析したことで，第一次世界大戦以降に成長してくる新中間層から，さらに昭和恐慌期には「大衆」が販売のターゲットになっていたことが明らかになった。染呉服商（問屋）が昭和恐慌で安価になった素材原料を使った巧みな商品を作って需要を創出し，さらに，その流通方法も見本市や産地からの直接仕入れによる百貨店への販売など，改革を図っていた。不況だったからこそ，低価格の商品開発がすすみ，大衆消費社会の萌芽が促進されたのではないか。

従来，歴史学では昭和初期は不況・恐慌の時代として描かれてきたが，その一方で，当時の染織界は「今日からみると不思議なくらい派手やかで美しいもの」で，近代の頂点とされる[155]。一見矛盾するように思える状況は，成長する大衆の購買力とデフレ下の商品開発や流通改革で一つの時代のなかで整合していた。今後も昭和恐慌を多面的に考察していく必要があろう。そのような時代状況のなかで，産業振興，とくに新しい産業の観光業を振興したい行政も加わり，染織祭は創設された。染織祭はまさに昭和恐慌・大衆消費社会・産業観光振興の3つの交点で花咲いた祭りであった。

〈付表１　染織祭年表〉

年	事　　項
昭和５年（1930）	８月末，丹後縮緬宣伝大会時に，同組合長・四大商店・新聞記者らの懇談会で，祭りの創設が話題に上る。秋，日本染織物見本市の折，京都府・市・商工会議所に拡大。
昭和６年（1931）	１月，見本市協会役員と府・市・商工会議所で「呉服祭」を協議。 染織神の奉戴，主体となる染織講社の組織などが具体化していく。 ４月 11・12 日，第１回染織祭挙行（以後，４月第１または第２土曜・日曜に開催予定）。岡崎公園グランドに社殿を仮設。１日目が祭典，２日目に行列（昭和 12 年まで同）。
昭和７年（1932）	４月９・10 日，第２回染織祭挙行。行列にやすらい花踊が加わる。 次年度は上古から江戸まで，女性時代風俗行列を予定。
昭和８年（1933）	４月８・10 日（雨天のため行列は１日延期），第３回染織祭挙行。 上古から江戸まで８時代にわたる女性風俗行列が完成。
昭和９年（1934）	４月７・８日，第４回染織祭挙行。
昭和 10 年（1935）	４月６・７日，第５回染織祭挙行。
昭和 11 年（1936）	４月４・５日，第６回染織祭挙行。
昭和 12 年（1937）	４月 11・12 日，第７回染織祭挙行。　７月７日，日中戦争開始。
昭和 13 年（1938）	４月８日，第８回染織祭挙行。未曾有の事変下で祭典のみを執行。 女性時代風俗行列を自粛（以後，再開されず）。
昭和 14 年（1939）	４月９日，第９回染織祭挙行（祭典のみ）。京都美術館で時代婦人風俗画展覧会開催。
昭和 15 年（1940）	４月８日，第 10 回染織祭挙行（祭典のみ）。
昭和 16 年（1941）	４月 12 日，第 11 回染織祭挙行（祭典のみ）。12 月８日，太平洋戦争開始
昭和 17 年（1942）	４月 11 日，第 12 回染織祭挙行（祭典のみ）。
昭和 18 年（1943）	４月 17 日，第 13 回染織祭挙行（祭典のみ）。
昭和 19 年（1944）	４月 15 日，第 14 回染織祭挙行（祭典のみ）。
昭和 20 年（1945）	４月９日，第 15 回染織祭挙行（祭典のみ）。８月 15 日，終戦
昭和 21 年（1946）	４月７日，第 16 回染織祭挙行（祭典のみ） 10 月 22 日，昭和 19 年から行列を自粛してきた時代祭が時代踊を開催。 平安講社の要請により歌垣・やすらい花踊・小町踊が協賛。
昭和 22 年（1947）	４月８日，第 17 回染織祭挙行（祭典のみ）。
昭和 23 年（1948）	４月 19 日，染織文化祭々典挙行。
昭和 24 年（1949）	４月 16 日，染織文化祭々典挙行。
昭和 25 年（1950）	７月１日，染織文化祭々典挙行。10 月，時代祭が７年ぶりに時代装束行列を再開。 染織祭のやすらい花踊・女房の物詣・醍醐の花見が加わる。
昭和 26 年（1951）	５月 17 日，染織文化祭々典挙行。 ７月 13 日，染織講社解散，京都織物商協会へ衣装・文書が移管。

注）（公社）染織講社関係文書 1-1，6-1 より作成。
昭和 23 年から「染織文化祭々典」「染織奉告会」などの名称が登場するので，回数をつけてない。
なお，平安神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史』年表編（平安神宮　1997 年）には，染織講社解散後の昭和 27 年～32 年にも４月に「染織祭開催」の記載があるが，主体が変わるため入れていない。

〈付表２　染織講社関係文書リスト〉

No	タイトル	年　代	所　属
1-1	染織祭記録	昭和６年	染織講社
1-2	染織祭式典行列執行日調	昭和６年以降	染織講社
1-3	備品台帳	昭和６年３月	染織講社
2-1	染織講社規約並施行細目	昭和６年２月起	染織講社
2-2	役職員退職記念品調	昭和６年６月以降	染織講社
2-3	染織講社役職員名簿講社員募集委員名簿	昭和13年４月（新調）	染織講社
3-1	衣裳行列担当組合並行列順位	昭和８年起	染織講社
3-2	時代行列衣裳寄託契約書綴	昭和８年以降	染織講社
3-3	衣裳貸与台帳	昭和８年以降	染織講社
3-4	時代行列衣裳貸与契約綴	昭和８年以降	染織講社
4-1	会議一件	昭和14年以降	染織講社
4-2	庶務一件	昭和14年	染織講社
4-3	庶務一件	昭和15年	染織講社
4-4	庶務一件	昭和16年	染織講社
4-5	庶務一件	昭和17年	染織講社
4-6	庶務一件綴	昭和18年	染織講社
4-7	庶務一件	昭和19年，20年	染織講社
4-8	庶務一件綴	昭和22年以降	染織講社
4-9	郵便発送簿　附受払簿	昭和10年11月以降	染織講社
4-10	市外出張命令名簿	昭和17年以降	染織講社
5-1	染織講社収支予算・決算綴	昭和６年～21年	片岡用
5-2	積立金台帳	昭和10年起	染織講社
5-3	予算支出簿	昭和15年度	染織講社
5-4	予算収入簿	昭和16年度	染織講社
5-5	予算差引簿	昭和16年度	染織講社
5-6	予算差引簿	昭和17年度	染織講社
5-7	経費差引簿	昭和19年度	染織講社
5-8	支出番号簿	昭和20年度	染織講社
5-9	支出番号簿	昭和21年度	染織講社
5-10	支出証憑書類綴	昭和17年度	染織講社
5-11	支出証憑書類綴	昭和18年度	染織講社
5-12	支出証憑書類綴	昭和19年度	染織講社
5-13	支出証憑書類綴	昭和20年度	染織講社
5-14	支出証憑書類綴	昭和21年度	染織講社
5-15	支出証憑書類綴	昭和22年度	染織講社
5-16	支出証憑書類綴	昭和23年度	染織講社
5-17	支出証憑書類綴	昭和24年度	染織講社
5-18	日計簿	昭和19年度	染織講社
5-19	支出簿	昭和14年度	染織講社
6-1	総会議事録（通常・臨時）	昭和22年12月	織　協
6-2	親展文書編冊（本織物統制㈱京都支店）	昭和19年度	織　協
6-3	議事録綴	昭和26年～28年	織　協

注）（公社）京都染織文化協会提供資料により筆者が作成。

注

1） 切畑健編『写真でみる日本の女性風俗史』京都書院 1985 年，（圧縮再販）『日本の女性風俗史』紫紅社 2003 年。主に ① 着装写真，② 関保之助・猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷編『歴代服装図録一 染織祭篇』歴代服装図録刊行会 1933 年の衣装解説，③『京都日出新聞』（現京都新聞）の第 1 回染織祭関連記事等を収録している。染織まつりの記述は同書による。なお，宮崎友禅斎生誕 330 年記念奉賛会は京都の染織業界 35 団体で組織（『京都新聞』1984 年 5 月 27 日付）。

2） 1）の『写真でみる日本の女性風俗史』の「序に代えて」，および 153 頁（田畑禎彦「『染織まつり』の意味するもの」）。

3） 京都染織文化協会監修『日本衣装絵巻 —— 卑弥呼から篤姫の時代まで』神戸ファッション美術館展覧会図録 2015 年。年表や簡単な歴史解説は収録されているが，衣装とその技法解説を中心においている。筆者はこの展覧会の図録（一部）と，「京の『染織祭』 忘れられた祭と衣装の歴史」（佐藤能史編『染織情報 α』2016-1 染織と情報社 2016 年 4～5 頁）を書いた。

4） 阿南透「昭和初期の『新しい祭り』—— 京阪神の事例から」（江戸川大学編『情報と社会』17 2007 年），53～66 頁。阿南が比較する大阪・神戸の祭りは，大阪商工祭協会『大阪商工祭記念誌』1933 年，神戸市民祭協会『神戸 みなとの祭』1933 年に詳しい。とくに大阪商工祭は猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷が時代風俗行列の指導者，衣装は高田・荒木・松下の 3 装束店が制作している。指導者には 3 人の他に，小西大東が名を連ねている。

5） 北野裕子「忘れられた祭・京都染織祭 —— 大衆女性を中心とした祭の構想」（女性史総合研究会編『女性史学』22 2012 年），87～89 頁。

6） 満薗勇『日本型大衆消費社会への胎動 —— 戦前期日本の通信販売と月賦販売』（東京大学出版会 2014 年）が大衆消費社会論の研究状況，問題等を最も的確に整理しており，戦後の高度成長期ではなく，「戦間期に新しい消費のパラダイムの登場という画期」（12 頁）を置いていることに筆者も賛同しており，参考とした。また，右田裕規「大正・昭和初期の祝祭記念品の都市購買者像」（公益財団法人史学会編集発行『史学雑誌』第 126 編第 9 号 2017 年 41～63 頁）は，ナショナリズムと大衆消費社会との関係を論じ，当該期における都市購買層の祝祭記念品の旺盛な購入熱を描いている。この他，竹村民郎『増補 大正文化 帝国のユートピア』（三元社 2010 年）は，第一次世界大戦後に大衆消費社会の起点をおき，阪神地方の経済発展によって，大量消費市場が関西一円に成立したとする。

7） 染織講社「庶務一件綴」4-8。

8）「解説」山本花魂編『染織祭グラフ』山本写真印刷工場 1931 年。

9）『京都日出新聞』1931 年 4 月 11 日付。

10）『京都日出新聞』1931 年 1 月 19 日付。なお，当時の「京染」とは「京都で出来る染物の総称であつて主として模様紋附友仙などの絹布の染物」（高橋新六『京染の秘訣』洛東書院 1934 年 581 頁）をいう。同書には十数種の染色技法が挙がっている。

11） 京都商工会議所内田中盛憲編『京都染織物見本市案内』京都染織物見本市協会 1926 年，5 頁。

12） 11）と同じ，1～4 頁。

13） 11）と同じ，11～14 頁の「出品種別一覧検索」より数えた業者数。

14） 北野裕子「昭和初期の京都染織業界 —— 室町問屋の動向を中心に」龍谷大学京都産業学センター・共同研究プロジェクト編『京都の流通産業研究』創刊号 2017 年 104～112 頁。

15）『京都日出新聞』1931 年 1 月 22 日付。

16）『京都日出新聞』1931 年 1 月 30 日付。記事には「百廿団体を網羅」とあるが，誤りであろう。

17）『京都日出新聞』1931 年 2 月 13 日付。
18）染織講社「染織祭記録」1-1。
19）18）に同じ。
20）8）の『染織祭グラフ』に同じ。
21）8）の『染織祭グラフ』,『京都日出新聞』1931 年 4 月 11 日付などには「官民合同」と記されているが,「官」は国を表すので，府・市の場合は「公」が適切であろう。
22）『京都日出新聞』1931 年 2 月 15 日付。
23）『京都日出新聞』1931 年 1 月 22 日付。
24）『京都日出新聞』1931 年 4 月 9 日付。ただし，呉織女と漢織女は合祀。
25）『京都日出新聞』1931 年 2 月 17 日付。
26）『京都日出新聞』1931 年 3 月 14 日付。
27）『京都日出新聞』1931 年 4 月 11 日付。
28）2015 年 4 月 28 日，龍谷大学京都産業学センターにおける株式会社千總代表取締役社長仲田保司氏の講演「老舗千總　460 年持続経営の秘密とは」後のヒアリングによるが，同社は日本のきもののトップブランドである。講演内容は，龍谷大学京都産業学センター・共同研究プロジェクト編『京都の流通産業研究』創刊号 2017 年，2〜17 頁に所収。
29）『京都府市会議所連合調査報告書』58　1930 年 10 月（奥付，発行所なし）龍谷大学京都産業学センター所蔵「京都商工会議所寄贈資料」。月例報告が昭和 5 年上・下として，6 冊ずつ綴られており，京都商工会議所が府下の「丹後縮緬」も併せて調査している。
30）29)に同じ。
31）銘仙についての記述は，湯原公浩編『別冊太陽　銘仙　大正昭和のおしゃれ着物』（平凡社 2004 年）を主に参考とした。
32）西陣織物同業組合編『西陣織物振興策ニ就テ』（同組合　1930 年）の「はしがき」によると昭和 4 年（1929）12 月 12 日に京都府庁において第 1 回「西陣織物振興会」が開催されたとある。その後の動きについては西陣織物振興会編『西陣織物振興会報告書』（同会編　1931 年）に詳しい。
33）『大阪朝日新聞』1931 年 2 月 10 日付。
34）『京都日出新聞』1931 年 4 月 11 日付。
35）丹後縮緬同業組合『丹後縮緬』宣伝号　1930 年　3〜4 頁。
36）藤井光男『戦間期日本繊維産業海外進出の研究 —— 日本製糸業資本と中国・朝鮮』（ミネルヴァ書房　1987 年），青木英夫「不況の時代と風俗 —— アメリカ一九三〇年代の一考察」（『風俗』30 巻 2 号　1991 年），社史編纂委員会編『郡是製糸六十年史』（郡是製糸株式会社　1960 年）等を参考とした。
37）丹後産地の力織機化については，佐々木淳「戦間期における丹後の本店銀行と縮緬業」（松岡憲司編『地域産業とネットワーク』新評論　2010 年 111〜133 頁)に詳しい。
38）北野裕子『生き続ける 300 年の織りモノづくり —— 京都府北部・丹後ちりめん業のあゆみから』新評論　2013 年。
39）津原武「丹後縮緬の検査に就いて」（丹後縮緬同業組合『丹後縮緬』宣伝号　1930 年）5 頁。
40）39）に同じ，5〜6 頁。
41）株式会社阪急百貨店社史編纂委員会編『阪急百貨店 25 年史』（同社　1976 年）114〜117 頁。
42）2012 年 9 月 6 日，猪熊兼勝氏のヒアリングによる。

43）内閣統計局編『昭和五年　国勢調査報告　第四巻　府県編　京都府』1933 年，64～67 頁。
44）『京都日出新聞』1931 年 1 月 30 日付。数値は昭和 4 年末現在，大京都市域。なお，第 2 位の「被服」は原本では「波服」になっている。
45）京都市総務部庶務課『京都市政史』上巻　1941 年　656～657 頁。
46）日刊工業新聞・京都府共催「百年経営を考える　老舗フォーラム」2014 年 2 月 21 日開催。美濃吉佐竹力総社長・聖護院八ツ橋総本店鈴鹿且久社長談による。
47）6）の右田裕規「大正・昭和初期の祝祭記念品の都市購買者像」に同じ。
48）工藤泰子「御大典記念事業にみる観光振興主体の変遷」（丸山宏・伊從勉・高木博志編『近代京都研究』思文閣出版　2008 年），226～257 頁。
49）京都市総務部庶務課『京都市政史』上巻　1941 年　658～659 頁。
50）「昭和五年京都市会会議録第三号」『京都市会会議録』昭和五年上，981 頁。
51）「昭和五年京都市会会議録第四号」『京都市会会議録』昭和五年上，1021～1022 頁。
52）「昭和五年京都市会会議録第四号」『京都市会会議録』昭和五年上，1021～1023 頁。
53）「昭和五年京都市議会会議録第七号」『京都市会会議録』昭和五年下，43 頁。昭和 5 年 5 月 19 日付。
54）京都市『京都の歴史』第 9 巻（京都市史編さん所　1976 年）24～39 頁に詳しい。
55）『京都日出新聞』1931 年 3 月 7・17・27・31（夕刊）日付，4 月 1・7 日付など。
56）『京都日出新聞』1931 年 3 月 17 日，4 月 9（夕刊）日付など。
57）染織講社「染織講社役職員名簿講社員募集委員名簿」2-3，および，8）の山本花魂編『染織祭グラフ』。
58）染織講社「染織祭記録」1-1。なお，祝賀踊については『京都日出新聞』1931 年 4 月 13 日付による。
59）『京都日出新聞』1931 年 4 月 11 日付。
60）59）に同じ。
61）『染織日出新聞』創刊号　1932 年 4 月 1 日付。
62）染織講社「染織祭記録」1-1。史料では時代と組合を並記しているが，本稿では追い込み，そのため・を用いた。また，第 3 回染織祭で制作された各時代の旗では江戸時代は前期と後期だが，染織講社文書・『図録』等には初期と末期とあり，本稿はこれを用いた。
63）男性装束は上古（京染呉服悉皆同業組合）摺衣，奈良朝（京都染呉服商組合）朝服，平安朝（関東織物盛奨会）水干，鎌倉（京都縮緬商組合・丹後織物同業組合・京都浜縮緬商組合・京都生絹同盟会）直垂，室町（西陣織物商組合）素襖，桃山（日本染織物見本市協会等）肩衣，江戸初（京都染物同業組合）羽織袴，江戸末（西陣織物同業組合）継裃となっている。62）の「染織祭行列順序（昭和九年四月八日）」による。これらの装束は第 1 回目から同じと思われる。
64）関保之助・猪熊浅麻呂・出雲路通次郎・猪飼嘯谷編『歴代服装図録一　染織祭篇』歴代服装図録刊行会　1933 年。
65）関保之助（1868-1945）は有職故実研究家，明治 28 年帝室博物館に入り，昭和 8 年には同館学芸委員，母校東京美術学校（現東京芸術大学）や京都帝大にも出講（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社 2001 年，所収巻 1042 頁）。猪熊浅麻呂（1870-1945）は国学・有職故実を修め，京都帝大講師を経て，大正元年に白鳥神社社司（香川），同 3 年に京都帝室博物館嘱託，神社祭典等の考証・保存に努める（『同』所収巻 225 頁）。出雲路通次郎（敬通：1878-1939）は有職家・神職，明治 38 年に京都下御霊神社社司，大正・昭和の即位大礼で大礼諸儀など故実調査を

担当，京都帝大，仏教大学（現龍谷大学）等にも出講（『同』所収巻 160 頁）。

66）　江馬務『日本風俗史』国史講座刊行会　1929 年。

67）　江馬務（1884-1979）は江馬天江（幕末明治の儒学者・医師）の孫，風俗史学者。明治 40 年京都帝国大学史学科第 1 期生として入学，卒業直後の明治 44 年に風俗研究会をつくり，大正 5 年に機関誌『風俗研究』を発刊。京都女子大学ほか多数校に出講（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社 2001 年，所収巻 313 頁）。

68）　江馬務編『風俗研究』（152 号　風俗研究所　1933 年）の「主幹日誌」に「十四日　時代祭の事件起る」とあり（25 頁），自著に挿入する写真の使用をめぐり，他の委員と難しくなったと思われる。

69）　小山弓弦葉「風俗研究活動における吉川観方コレクション ―― その染織資料に着目して ――」（『奈良県立美術館紀要』第 12 号　1998 年　11～60 頁），22 頁。なお，江馬が染織祭の委員であったことは指摘されている。

70）　8）の『染織祭グラフ』の「序」を執筆。

71）　64）の『歴代服装図録一　染織祭篇』の「序」。

72）　野村正治郎については，丸山伸彦「近代の造形としての小袖屏風」（国立歴史民俗博物館資料図録 2『野村コレクション　小袖屏風』国立歴史民俗博物館　2002 年）185～207 頁，澤田和人「野村正治郎と近世女性の小袖型服飾」（同）332～337 頁に詳しい。

73）　吉川観方については，2002 年 10 月，京都文化博物館が吉川の所蔵品の展覧会を開催，その時の図録『吉川観方と京都文化』に詳しい。その中の藤本恵子「吉川観方と京都文化」169～173 頁が，吉川の生涯と研究について最も的確にわかりやすく記述している。また，染織資料については，69）の小山弓弦葉「風俗研究活動における吉川観方コレクション ―― その染織資料に着目して ――」等がある。吉川が出版・監修した書籍については多数あり，図録『吉川観方と京都文化』を参照のこと。なお，吉川は昭和 43 年（1968）に第 1 回京都市文化功労者として表彰されている。

74）　高田装束研究所 HP　www.takata-courtrobe.co.jp/　2018 年 8 月 1 日閲覧。

75）　1）の切畑健編『写真でみる日本の女性風俗史』，128 頁。

76）　小山弓弦葉「染織祭衣装　調査報告書」公益社団法人京都染織文化協会内部資料　2009 年。

77）　山邊知行監修『京都の近代染織』京都織物卸商業組合　1994 年　15～16 頁。

78）　片岡用「染織講社収支予算・決算綴　昭和六年～二十一年」5-1 より作成。昭和 8 年の決算表は所在しない。

79）　78）によると，各組合の寄付金［22600 円］の負担額は以下のとおり。

上古	京染呉服悉皆同業組合	864 円
奈良	京都染呉服商組合	2800 円
平安	関東織物商組合（盛奨会）	1290 円
鎌倉	京都縮緬商組合	2376 円
室町	西陣織物商組合	1300 円
桃山	日本染織物見本協会（5020 円）・半襟商組合（600 円）・刺繍同業組合（150 円）・木綿商京盛会（500 円）・洋反物商組合（100 円）・蚕糸商同業組合（100 円）	
江戸初	京都染物同業組合	3520 円
江戸後	西陣織物同業組合	3980 円

80）　78）に同じ。

81）「昭和七年京都市会会議録第七号」（『京都市会会議録』昭和七年上）229～230 頁。
82）「歳出臨時部　第十九款第六項勧業費補助　第五種目染織講社費補助」による。
83）81）に同じ，594 頁。
84）「昭和八年京都市会会議録第五号」『京都市会会議録』昭和八年上）278 頁。
85）「昭和八年京都市会会議録第三号」『京都市会会議録』昭和八年上）179 頁。
86）『京都日出新聞』1932 年 4 月 10 日付夕刊。
87）『京都日出新聞』1934 年 4 月 9 日付夕刊，『同』1935 年 4 月 8 日付，『同』1936 年 4 月 6 日付。
88）『京都日出新聞』1937 年 4 月 12 日付。
89）『産経新聞』（2016 年 7 月 17 日付）夕刊，7 月 24 日付夕刊によると，京都府警が発表した人出は，先祭が 19 万人（13 時現在），後祭が 10 万人（正午現在）とある。
90）恩賜京都博物館『昭和六年自四月九日至四月廿二日　染織名品展覧会目録』奥付なし。同書の「凡例」には「京都市に於ては四月十二日染織諸神の宏徳を宣揚しその洪恩を感する為め染織祭を挙行するに際し当館にては本邦を中心とし染織物の名品を蒐集し（略）展覧せり」とあり，染織祭に合わせて開催されたことがわかる。
91）四条繁栄商業組合（四条通の小売商組合）は「花園」をテーマに少女 20 人が春の草花に扮装して馬車 10 台に分乗し，さらに男 12 人が蜜蜂・女 10 人が蝶に扮装して行列した。京都広告協会は「シンデリア姫」をテーマに女優 1 人が姫となり，侍女 1 人と共に 15 頭立の儀装馬車に乗車，警備隊 15 人などが付いた。染織講社「染織祭記録」1-1，および，『京都日出新聞』1936 年 4 月 12 日付による。
92）たばこと塩の博物館所蔵。（公社）京都染織文化協会撮影写真を提供。日本郵趣出版『戦前の小型記念スタンプ集』（郵趣サービス社　2013 年）で，昭和 10.4.6～7（発行：京都市内一，二等局），昭和 11.4.4～5（発行：京都，聖護院），昭和 12.4.10～11（発行：京都，聖護院）の 3 点が確認できる。
93）『京都日出新聞』1938 年 4 月 13 日付夕刊，8）の『染織祭グラフ』等。
94）京都市産業部観光課編『京都名勝』1936～1939 年には「染織祭」の紹介があり，1939 年の口絵写真が 4 つの祭りを並べている。
95）京都市総務部庶務課『京都市政史』上巻　1941 年　666 頁。
96）京都市観光課『奉祝紀元二千六百年』昭和 15 年（1940）。
97）江崎千代吉『大京都便覧』大京都便覧発行所　1938 年。
98）染織講社「染織祭記録」1-1。
99）98）および『京都日出新聞』1938 年 4 月 9 日付。
100）98）に同じ。この猪飼筆による時代風俗画は協会に所蔵されているが，男性画はない。おそらく，男性画は 63）にある各組合員が，女性列の後で，時代装束を着衣した様子を描いたものであろう。
101）猪飼嘯谷（本名は卯吉，1881-1939）は日本画家，谷口香嶠に四条派を学び，明治 43 年～大正 14 年まで京都絵画専門学校（現京都市立芸術大学）で教える。歴史画を中心に文展で活躍し，代表作「大正天皇大礼絵巻」（上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社 2001 年，所収巻 112 頁）。
102）筆者は 2016 年 11 月 30 日，聖徳記念絵画館でその絵画を確認した。明治天皇「即位礼」については，明治神宮外苑編『聖徳記念絵画館オフィシャルガイド』（東京書籍　2016 年　56 頁）を参照。

103）　白木屋編『白木屋三百年史』（同社　1957 年）460～489 頁。なお，グランドオープンの展覧会チラシを 2018 年 5 月，小倉久美子氏より寄贈いただき，協会が所蔵している。

104）　染織講社「時代行列衣裳貸与契約綴」3-4。

105）　104）に同じ。

106）　104）に同じ。

107）　104）に同じ。

108）　実際に企画案通り展示したのかは不明だが，2 月に同奉祝会副総裁近衛文麿から市村市長に宛てた礼状が協会に所蔵されているので，開催したことは間違いない（染織講社「庶務一件」4-3）。

109）　104）に同じ。なお，この文書では近衛文麿が会長になっている。

110）『京都日日新聞』1940 年 5 月 5 日・7 日付および同日夕刊に，「服飾維新展覧会」の広告及び記事が掲載，主催は同社，後援は皇戦会。

111）　染織講社「庶務一件」4-3。講社主催で計画していた上古と奈良の 2 時代の展示会を中止して要請に応じている。

112）『京都日出新聞』1941 年 4 月 13 日付。

113）『京都日出新聞』1940 年 4 月 8 日付。

114）『京都日出新聞』1941 年 4 月 13 日付。

115）　染織講社「会議一件」4-1，片岡用「染織講社収支予算・決算綴　昭和六年～二十一年」5-1。

116）　染織講社「庶務一件」4-5。

117）『京都日出新聞』1938 年 4 月 9 日付。

118）　染織講社「染織祭記録」1-1。

119）　染織講社「庶務一件」4-6。

120）　染織講社「染織祭記録」1-1。

121）　染織講社「庶務一件」4-6。開催の理由は 124）を参照のこと。

122）　染織講社「庶務一件」4-7。

123）　染織講社「染織祭記録」1-1，同「庶務一件」4-7。

124）　染織講社「会議一件」4-1。その後，10 月の理事会では土地の無料使用を条件に建築費を市に寄付して建築を委託し，便宜を図ってもらう案が出されたが（同「会議一件」4-1），実際の方法は定かではない。翌 17 年 2 月 14 日付で市長宛に竣工届を提出（同「支出証憑書類綴」5-10），落成式（2 月 22 日）の案内も残されており（同「庶務一件」4-5），さらに昭和 19 年 5 月の理事会協議事項でも衣装保管場所を「現状ノ倉庫」と記述し，この倉庫を国際航空会社から貸与を求められていること（同「会議一件」4-1）などから，倉庫は完成したと思われる。また，衣装がこの倉庫に収蔵されたため，昭和 18・19 年に近隣の公会堂で虫干しを兼ねた展覧会が必要となったのではないかと思われる。

125）　染織講社「会議一件」4-1。

126）　64）に同じ，71 頁。

127）　京都友禅協同組合 HP（www.kyo-yuzen.or.jp/　2018 年 8 月 1 日閲覧），「京友禅について」→「京友禅の技法と作品」→「手描き染技法」→「37．玉糊友禅」を参考とした。

128）　染織講社「庶務一件」4-7。

129）『京都新聞』1946 年 10 月 20 日付。

130）　染織講社「庶務一件」4-8。

131）『京都新聞』1946 年 10 月 20 日付。

132）『京都新聞』1946 年 10 月 23 日付。

133）平安神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史』本文編　平安神宮　1997 年　242 頁。

134）染織講社「庶務一件」4-8。

135）134）および，133）の 244 頁。

136）『京都新聞』1946 年 10 月 20 日付。

137）『京都新聞』1950 年 10 月 21 日付。

138）137）に同じ。

139）染織講社「庶務一件」4-8。

140）『京都新聞』1950 年 10 月 23 日付。

141）平安神宮百年史編纂委員会編『平安神宮百年史』年表編　平安神宮　1997 年　209～211 頁。

142）染織講社「庶務一件」4-8，および，141）の『平安神宮百年史』年表。

143）染織講社「庶務一件」4-8。なお，このほか，衣装は高田装束店ほか 3 店で保管しているが，出来れば二条城の倉を貸用出来ないかという意見も出ている。124）でみたように倉庫は完成し，そこへ一旦は収納したものの，戦時下での倉庫貸与要請か，あるいは，戦後，岡崎一帯を占領軍が占拠したため，倉庫も明け渡したのではないかなどの理由が考えられるが，いずれも定かではない。

144）祇園祭編纂委員会・祇園祭山鉾連合会編『祇園祭』筑摩書房　1976 年　71～73 頁。氏子町の財源だけでは運営が難しくなり，広く市民や団体，各方面へ呼びかけるため，昭和 25 年（1950），「祇園会山鉾巡行運営委員会」を発足している。

145）「京都織物卸商協会第四回通常総会議事録」（織協「総会議事録（通常・臨時）」6-1）。

146）昭和 26 年 7 月 13 日「昭和二十六年五月十七日の理事会決議に基き講社運営の主体を京都市経済局商工貿易課より京都織物卸商協会に移行せしむる」ため，「染織講社財産引渡証書」が「引渡人　染織講社理事長　光明正道」と「引受人　京都織物卸商協会理事長　園城留二郎」の間で交わされた（染織講社「庶務一件」4-8）。

147）「染織講社収支予算・決算綴　昭和六年～二十一年」5-1 の表紙に「片岡用」という記載がある。片岡は昭和 15 年段階で，京都市商工課染織講社係であったことが片岡に宛てた封書から確認できる（「庶務一件」4-3 に在中）。

148）141）の『平安神宮百年史』年表編には昭和 32 年（1957）まで衣装を引き継いだ織協が平安神宮で毎年 4 月に染織祭を開催したことが記されており，どのような祭祀だったのか，平安神宮所蔵史料の調査が必要であろう。また，昭和 28 年から始まる「染織まつり」という業界の販売促進イベントもある（織協「議事録綴」6-3）。

149）2018 年 3 月 28 日，NPO 法人「京都の文化を映像で記録する会」理事長濱口十四郎氏より，昭和 7・11 年の映像を提供いただいた。

150）長崎詔子「京都花街・芸妓の近代祭礼への関わり：染織祭を事例に」立命館大学卒業論文（1676130096）2017 年提出による。時代祭との関係のほかにも，祇園甲部では都踊の参加者が染織祭の行列に参加しているケースが多いことなどが指摘されている。

151）加藤政洋「廓の景観と祭礼 ――《島原》の太夫道中をめぐって」・三浦実香「祇園祭のねりもの ――《祇園東》芸妓衆の仮装行列」（加藤政洋編『モダン京都《遊楽》の空間文化誌』（ナカニシヤ出版　2017 年　97～113 頁・115～130 頁）。江戸時代のねりものについては，福原敏男・八反裕太郎『祇園祭・花街ねりものの歴史』（臨川選書 28　臨川書店　2013 年）があり，近代以降の研究が待たれる。

152）京都三大祭の一つ，葵祭の行列に斎王代と女人列が加わるのは昭和 31 年（1956）である。所功『京都の三大祭』（角川選書 268　2003 年）90 頁による。

153）昭和 36 年（1961）に始まる京都美容文化クラブが主催する「櫛祭」は毎年 9 月の第 4 月曜日，安井金毘羅宮での「久志塚」での祭典（櫛納めの神事）後，髪型時代風俗行列を行っている。吉川観方が創設に関わったこともあり，染織祭の各時代風俗から 1 点ないしは数点ずつが行列したような形態になっている。

154）54）の『京都の歴史』第 9 巻，119 頁。

155）77）の『京都の近代染織』，16 頁。

付記　染織祭は「せんしょくさい」「せんしょくまつり」「そめおりまつり」など，当時の新聞や雑誌でも，いくつかのふりがなが見える。筆者が最初に社団法人京都染織文化協会（現在は公益社団法人）を訪ねた時，協会では「せんしょくさい」と呼ばれていたこと，また，戦後に先行研究で述べた「染織まつり」もあり，本稿で対象とした染織講社主催の染織祭とは区別するため，現状では「せんしょくさい」と呼んでいるが，今後さらに検討していきたい。

謝辞　本稿を執筆するにあたり，公益社団法人京都染織文化協会，常務理事福井勝博氏ならびに加藤圭子氏には，史料調査，撮影，整理，写真提供など多くのご協力をいただきました。そして，これまで衣装・文献・写真・映像等の保管に尽力されてきた多くの方々に心より深謝申し上げます。

要　旨

染織祭は昭和6年（1931），昭和恐慌期に京都染呉服商（問屋）が発起し，京都染織業界が行政の支援を受けて創設された。主体は公民合同による「染織講社」であった。20年以上，春の京都で挙行された染織祭は主に祭祀と女性時代衣装行列から成る。前者は岡崎公園グランドに社殿を仮設して染織祖神を祀り，後者は8時代構成（上古～江戸）で143人分の衣装を制作，芸妓が着装し，市中を行列した。現在の祇園祭と同等の観客数に染織業界のみならず，多くの業界が便乗した。男性装束のみの時代祭と対照され，当時「京都四大祭の一つ」と謳われた。しかし，京都の高度な学識や技術を駆使した時代風俗行列は，その豪華ささゆえ，日中戦争が始まると自粛され，昭和8～12年の5年間で終わった。

その後，戦時下では苦労しながらも祭祀のみを継続し，衣装は日本文化を鼓舞する展覧会に求められ，それまでの染織祭から変質した。そして，戦後復興期にも祭祀は続き，衣装は時代祭に協力する形で再び市民の前に登場した。

恐慌・戦争・復興という激動の時代，短命に終わった染織祭の歴史研究はこれまでほとんどなく，『京都の歴史』第9巻にも記述がなく，今回，前述したように祭りの全容を初めてつかんだ。とくに，その創設をめぐり，昭和恐慌と大衆消費社会の萌芽という両者の関係に焦点を当て，① 中核の京染呉服商（問屋）を分析し，中間層ではなく，第一次世界大戦以降に成長してくる「大衆」を顧客にしていたこと，② 昭和恐慌が大衆消費社会を促進したこと，③ 支援をした行政（京都市）は不況脱却のため，産業振興・観光振興を図りたい思惑を持っていたことを明らかにした。

京都染織業界，京都市，京都産業界等，さまざま思惑が交錯した染織祭は，昭和恐慌・大衆消費社会・産業観光振興の3つの交点で花咲いた祭りであった。

キーワード：染織祭，昭和恐慌，大衆消費社会，産業観光振興，時代風俗行列

Summary

The Sensyoku Festival was founded in 1931 and lasted 20 years. It was promoted by kimono fabrics dealers, spread to the Kyoto dyeing and weaving industry, and Kyoto city government supported it. The Sensyoku Festival was comprised of two elements, ceremony to worship the dyeing and weaving gods and the parade displaying traditional costumes of each era of Japanese history. The clothes by high techniques of Kyoto were produced for 143 people. The Sensyoku Festival was called one of the big four festivals in those days. When Japan-China War began, the parade was restrained from, but, the ceremony to worship was continued. The parade was participated in the Jidai Festival a period of time after the war.

There was not a study until now about the Sensyoku festival. This time, I got the whole aspect of it. I pray for adding it to the history of Kyoto. I clarified relations about the Showa Depression and relations of the public consumption society in this article. So, the Showa Depression promoted public consumption society.

Keywords : the Sensyoku Festival, the Showa Depression, public consumption society, industry and tourism promotion, traditional costumes of each era of Japanese history